
はじめてまして・・・よろしくです。

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじめまして・・・よろしくです。

【Nコード】

N6279F

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

主人公の速人が、色々な経験をしながら夢をかなえるために！実現させるために！成長してゆく恋愛・青春グラフィティ。・・・と思っています。

第1話：はじまり

『はじめての街

はじめての空気

だけどボクはなぜか落ち着く

いつか来たような

ふるさとのような

だけどボクにははじめての街

におい？ 町並み？

いや 違う

きつと いつもキミから聞かされていたから

ずっと ずっと 一緒にいよう

離れずに ゆっくりと しっかりと歩いてゆこう』

「いつてきまあす。」

ああ・・・学校行くのはきらいじゃない。
クラスメイトも部活仲間もなかなか面白いヤツばかりで退屈しない

だけど、朝が早い事だけがツライ。慣れない。

「はあやあとおゝ！ 傘、忘れてるう！」

「えっ？ 今日、雨降るっけ？」

「降る！ 絶対降るから！ 持っていきなさい。」

さあ、早く！ 早く！ 間に合わなくなるよ！」

「はあい。行つてきまあす。」

マジで雨なんか降るのかよ。母さんも時々ポカしたり、意味不明な行動するから

子供としてはついて行けない時あるよ、まったく。

まあいつかあ、コレも親孝行の一つということだねえ。

っていうか、やっぱり寒いよなあ。朝ってヤダよなあ。

僕も両親と同じで Teixeツアツなのかなあ？

っていうかマジ急がないと！ 電車乗り過ごす！！

「ふうゝ。助かったあ。」

ところで、ホントに降るのかよお雨。

周りの人は一応パラパラ傘持っている人もいるけど・・・空が晴れてきてるんですけど？

コレって気のせい？？

またか？ 母さんのポカ、コレで第何号目だよ。はあああ…。

第1話：はじまり（後書き）

ワタシ自身もはじめまして。です。

なんといっても、とっても久しぶりにお話を書くので緊張しております。ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます。これからも頑張ります。

第2話：いきなり現代

☐
今まで歩いてきた道は

この時のためにあつたのだろうか？

それとも また別のために頑張ってきたのだろうか？

僕はこのままの僕でいいのか？

俗にいう これがターニングポイントってやつなのか？

疑問符ばかりが並ぶ

並べようと思えばいくらだって出てくる

そして これからも 解決することはないだろう

そして これからも 悩みは増えること間違いナシ

☐

今から思うと我ながらスゴイと思う。

何てったって小学校4・5年生くらいからの夢をずっと追いつけてきて

今まさに現実のものになろうとしているのだから。

初めは単純に父親が教員だったから。

さらに言うならば祖父は教員になりたかった人だからだ。

祖父はどうしてならなかったのか？という・・・時代が邪魔をしたのだ。

そう、戦争の真っ只中の青春をおくっていたからだ。

その夢というのは他ならない「日本史の教授になる」という夢へまた一歩近づこうとしているんだ。

今は、初秋。風は未だ生暖かいが、空は澄みきっている。

若者は真夏のような格好でキャンパスを闊歩している。って僕もまだ若者の部類だが……

先日研究室にて師匠とも呼べるほど師事を仰いでいる先生から呼ばれた。

そして、週に2回ほどだけけど、ピンチヒッターで僕が教鞭をとってくれないだろうか？つというお話だった。

なんでも……旧友から頼まれた別のキャンパスでの講義が入って、スケジュールがパンパンになってしまった。身体が身動きできなくて、友人の頼みともあり断れなくて困っている。。。

つという事で、この僕に白羽の矢が……！！

そして、今日お返事をする約束になっているのだった。

……コンコン

「松本です。先生はおいででしょうか？」

「おお、松本君だね？こちらへ入りなさい。」

「……はい。失礼します。」

教授の部屋には何度も入ったことはあるが、今日は違う。ドキドキが止まらない。面接を受けるよりもドキドキしていると思う。そし

て、重厚な扉を開けて入ってゆく。

「じゃあ、もう一度聞くけど・・・請けてくれるかね、先日の話。」

「はい。宜しく願います。」

長年の僕の夢がまた一步近づいた。つという心境ですので、有難くお請け致します。」

「まあ、来週の火曜からだけれど、頑張ってくれたまえ。

私個人としても、色々な意味で君には期待をしているのだよ。

今までの伝統や型にはまったやり方も大事だが

今の世代の生徒達にあった新しい斬新なアイディアも必要だと考えているのだよ。」

頭の中では大人気ないが…バンザイしてジャンプしている自分がいる。

もちろん顔はクールに真面目に装っている。

斬新なアイディアとは。やはり、いつも話している自論のことだろう。

「期待に応えられますよう、頑張っていきたいと思います。宜しく
お願い致します。」

「いやあ、こちらこそ頼むよ。」

よっしゃあゝ!!!間違いないんだ!!!

今まで院に残って研究を続けていた甲斐があった。

来週から恩師の助手として表舞台に立てる。

（助手って位置は未だ変わらないけど。。。いつかは必ず!）

僕のデビュー戦つというか”初陣”だ!!!正式に教壇に立てるのだ。

もう一度ここで整理しておこう。子供の頃から家族の影響バシバシで社会科畑に育ってきた。

中でも歴史好きな祖父の影響と希望を一身に受けて

中学受験を乗り越えて私学に進学

小学校から歴史学者・教授になる！と夢を描いてゆるぎない目標に掲げて

どんなに数学に悩まされようと

どんなに英語に悩まされようと

ただただひとつの夢のためにと耐え忍んでついたら大袈裟かもしれないけれど

自分なりに努力を積み重ねて邁進してきた。

そして、恩師の代理として来週の火曜にたくさんの生徒を前にして教壇に立つ。

夢のような夢ではない話だ。

しかもこんなに早く叶うなんて。思いもしなかった。

ヤバイ。頭の中真っ白になりかけているぞ？

1時限分の時間配分と資料作りと準備しなければならぬ。

そうそう、何を着てゆくかも考えなければ・・・

まず、アイツに報告。っていうか仕事かメールにするか。

それから両親に報告と・・・あそこにも寄ってから帰るとするか。

ここのところ忙しくて足運んでなかったからなあ。

速人は駅へと着いたが、いつもとは反対の南口へと降りて行った。

ゆつくりと商店街を歩き、途中花屋へ立ち寄り・・・

そのまま駅の方へは戻らずに、さらに先をゆつくりとしかししかりとした足取りで進んでいった。

賑やかな音楽がフェイドアウトしてゆき・・・小さな畑や民家、小学校が見えてきた。

ちょうど小学校の正門と向かい合うようにして

古めかしくも重厚な木の扉と白壁に瓦が続き、速人は立ち止まりき

びすを返し軽く一礼した。

頭を上げると立派な門を潜り入っていった。

そこは立派な寺院だった。

本堂はさほど古くはないので途中で立て替えたのだろう。

速人は本堂で手を合わせた後、ゆっくりと墓地の広がる方へ足を運ばせた。

深呼吸をした後に祖父へ報告すると柔らかな表情をし、家路に着いた。

「あつ！メールだ。仕事終わったのか？　はいはい。今見ますよ・
・。」

コートをはらりと開いてケータイを取り出した。

第3話：キャリア？（前書き）

前話は、速人の大きくなってからでしたが、今回からはまた中学生の速人へ戻って成長する様子になっております。

第3話：キャリア？

☐ どうからでもかかってこい！

いままでの 僕の知識を 試す時

不思議な気分だけれど

今は 負ける気がしない

っていうか

パワーが沸々している感覚がわかる

ジンジン…ビンビン…違うなあ

ドクドク…身体中に響いてる

☐

だんだん雲行きがアヤシクなってきたなあ。朝は日も射したのに。意外と母さんの不思議パワーも当たる時もあるんだなあ、助かったあ。

しかし、こんなに土砂降りにならなくても…

「よう、速人！今日の会議には行くんだろ？悪いが今日委員会ある

から、メンバー揃ったらお前が仕切つていてくれ！」

「え〜！センパイいきなりそんなこと言われたって〜！」

「大丈夫！大丈夫！資料も段取りも準備してあるから大丈夫だって。まあ大まかに流れだけは、あとで委員会始まる前にメールするから。」

僕の部活の先輩で高橋先輩だ。

彼は、僕より一つ上の中学2年の特進クラスで、常に一桁をとり続けている。

だけど明るくて、パワフルで、後輩の面倒見もよく。とにかく力ツコイイ人です。尊敬もしています。

しかし、今みたいに少し強引で豪快なところがあって・・・いつも僕は絶対に断れない。

「はい。。。分かりました。じゃあ終わり次第報告します。」

とは言ったものの大丈夫かな？メンバーの中にはもっと上の先輩もいるわけだし・・・

”何？コイツ。いい気になってんじゃねえよ。”とか思われたらどうしよう？？

まあその時は顧問の蒲田先生に助け舟だすかあっていつでも頼りにならないからなあ。

今日は各部門のチーフが集まり、当面の予定を確認する会議の日。

「えつとお。みなさん揃いましたね。

今日は高橋センパイが委員会ということですので、代理として松本が進行を預かっております。宜しく願います。

では早速始めさせて頂きたいと思います。

今回の企画なんですが、ここに資料がありましてお配りしますので、

先ずは目を通してください。・・・はい、順にとってまわして。」

もちろんこの資料だって、昨日の放課後に高橋先輩が作っておいた資料なんだけど。。。

「いいですかあ？ええ、来年度はウチの学校の120周年記念の年にあたります。

そこで、これまでの記念行事では残せなかった”映像”というカテゴリで資料を残そうと思っています。

しかし、一言に120年間を映像化するというのはムリなので、時代ごと・大きな出来事ごとなど指針を決めて、スポットで追っていくながら作りたいと思います。

では、今日は各自この部分を担当したいかの希望をとりたいと思います。」

・ ・ ・

「では、次回の部会では、各担当の調べた事柄をレポート化して情報交換し、まとめ方の輪郭をハッキリさせてゆきたいと思いますので、宜しく願います。お疲れ様でした。

今日はご苦勞様でした。そして、ありがとうございました。」

ふう、完了。って完了してなかった先輩にメールしなきゃ！報告っ報告っとお。

・・・すると、いきなり教室の扉が勢いよく開いた。・・・

ガラガラッ

「おつつかれさぁん」

高橋先輩がニカニカ笑って入ってきた。

「あっセンパイ！委員会終わったんですか？！今メール入れようと思っただですよ。」

「いやぁ、ちょっと前に終わってたけど。あんまりカッチョよくやってるから入れなかったんだよねえ。まあデビュー戦お疲れ様でしたぁ。」

「え、見てたんですかぁ！入ってきて換わってくれたら良かったのに！ずるいつすよぉ。結構いっぱいいいいでしんどかったですよ。」

いやこれ本当の話。冗談又キで本当にいっぱいいいいで進行と意見をまとめていた。

ところが…にも関わらず、先輩はカラカラと笑いながら話を続けた。

「まあまあそういうな。授業中の先生みたいでなかなかサマになってたぞ。これからも俺の用事が重なった時はヨロシクな！」

「そんなぁ。しばらくは勘弁してくださいね。」

これもホントの本当だ。しばらくは勘弁して欲しい。

心の準備もないままだったのも困るよなぁ。

「まあ、その代わりと言っちゃぁなんですけど数学と英語教えてください！勉強のコツっていうか・なんか行き詰っちゃってるって感じで、スランプなんですよ。」

「じゃあ今日の褒美として少し面倒みてやるかぁ。」

いやぁ今日はホントに急だったしビックリしたなぁ。
だけど、我ながら終わった後の爽快感というか達成感というか・・・
何ともいえない何かを感じたのは確かかもしれない。
高橋センパイも言ってたけど『授業中の先生』かぁ。やっぱり教師
っていいよなぁ。

そういえば、小学校の時もクラスの算数分からない！って仲間とか
隣の席の女子とかに教えた時も

「はやとの方がセンセイより分かる〜！すごいね〜。」とか

「はやとお〜！通信簿見てくれよ！算数お前のおかげで初めてBが
ついた！！」ってヤツもいたなぁ。

やっぱり本気で目指してみようかな・・・でも、教えるなら絶対日本
史だな！

？！っていうことは、文系で進むから英語は絶対外せないなぁ。

おいおいヤバイよぉ。終わっちゃうよ〜。

先ずは、目の前の期末から心入れ替えて向かっていかないと、将来
の選択肢の一つにもなくなっちゃうよぉ。

第3話：キャリア？（後書き）

なんとか第3話までできました。

骨組みのイメージだけで進めているのでこれから速人がどんな経験をしながらか成長するかは私も分かりません（笑）私自身も母の目線で見守りたいです。

第4話：スランプ

☐ ”嵐の中の小船”

まったくその通りだ 情けない

”迷路に迷い込んだよう”

迷って迷って 気分は最悪だ

誰でも通る過程だ とは言っても

頭の中身がどうにかなってしまったのではないか？

そんな気になるほど

僕の頭の中はグルグルしている

いつかは抜ける迷路

ならば ならば早く！ 早く光よ射してくれ ☐

僕、松本速人。13歳。中学1年生。

夢は歴史学者になること。日本史の教授になること。

小学校1年生の時に三国志を借りて読んでハマった。
全10巻のを2週間ほどで一氣に読みつくした。

さらに中国史を知ろうと、学習漫画を読んでみたら・・・

「三国志演義」という戯曲からなる話と分かり大ショックをうけた。

そして、祖父の影響もあり日本史にのめり込んでいった。

祖父の部屋は、僕にとって楽しくて安心する場所だった。

家の中では”安全地帯”だった。

祖父の体験談を聞いたり、難しい書物もたくさんあったり、何より
口うるさい母さんから逃げ出せ、開放された気持ちになった（笑）

その後、母さんの勧めもあって、中学受験なるものに挑戦すること
になった。

とは言っても、僕の周りの友達も受験する子ばかりで、初めは・
自分だけ取り残されていくのはイヤだったからだ。

もともと目標が決まっているだけに、指針を決めるのには苦勞しな
かった。

ただ・・・頭。頭の中身。

塾の先生の言葉を借りるなら・・・

”引き出しが足りない 全く足りない”

今考えても、スゴイ過密なスケジュールをこなしていたと思う。

今現在同じように出来るか？と聞かれたらハッキリ言える。

「出来ない。絶対ムリです。」

という自信はある。なんてヘンな自信だよ。って言われてしまう
かもしれないが本当だ。

だけど、今は後悔していない。
むしろ、自分の夢に一步步近づいた気がしたから、頑張った自分自身を誉めてやりたいくらいだ。

おそらく地元の中学に進んだら、夢は夢のままに終わるかもしれない。

もし…もし！叶ったとしても、かなり遠回りをして、確率的にはとても低いはずだ。

そう考えるだけで恐ろしい

僕の通う学校は、そんな僕のような何かを頑張りたい！これだけは負けないぞ！つというモノを持っている。
そういう子供たちを応援してくれるようなところです。
だから、こんな僕でも浮かないし楽しく通えるのだと思う。

でも・・・悩みは1つ。苦手教科の克服方法だ。

みんなはどうやってるのかな？

塾に行く気はないし。

ただやっても時間の無駄だし。

でも、やらなきゃ余計分からなくなるし。

ここ最近、堂々巡りの毎日だったりする。

焦ってもくる。不安だってぬぐえない。

でも、そういう時に限って母さんは言うんだ。

「なんか一番焦らなきゃいけない本人が一番のん気なんだから！」

何度聞かされたか・・・定期テスト直前には聞こえるんだなあ、ハア。

一応これでも焦っているし、試行錯誤して試してはいるんだよね。だけど、それが全くとっていいほど空振りで報われない。

今度の期末テストでは、親も先生も驚くほどの変身ぶりを見せて、一泡吹かせてやりたい気持ちもある！
ある。・・・あるんだけどなあ。

とりあえず、部室に行こう。

担当になった学校創立者の田中さんの資料探さないといけないし。

「高橋センパイ！この間ありがとうございました。」

「おおー！速人！どうだその後は。いい調子で頑張ってるかあ？」

「はっはい。調子は悪くないんですが・・・イマイチ調子いいとは言い難くって。」

相変わらず元気がいいなあ高橋センパイは…

この勢いに負けてっていうか、調子につられてしまうんだよねあ、いつも。

「そうかあ。まあ仕方ないかもなあ。」

いきなり上昇！エンジン全開！って訳にはいかないぞー。」

ガハハハハ…

出たよーこの笑い。これが出た時は機嫌がいい証拠って事なんだけどもな。

「でも、お前の場合は、自分から何とかしなくちゃ！ってオレに尋

ねにきた所が他のヤツとは違っていいところなのかもしれないぞ。
初めのうちは迷って迷って・・・自信がないからなあ。」

「はあ。。。ホントにいいんでしょうか？」

今、マジで迷いまくって目が回りそうなんだけど？

それがいいって余計分からなくなるよぉ～

しかも、誰か来たらどうするんだ？

全然イケてない自分がバレバレだし。

「まあ、来週の期末で勝負してみろやあ。それで自信がつくはずだからな！」

「ええ～！それまでこんな状態のままなんですか??」

「オレを信じる！なっ^o^」

でも・・・信じられないんですけど？っていうか、何を根拠にそんな事
言えるんだか教えて欲しいくらいだけど・・・

いや、ここで聞くとまた話が長くなるし、ややこしくなるから素直
になるかあ

「分かりました。」

「そんな沈んだ声で言うなよぉ～。まだ半信半疑だな？まあいい。
今はしっかり迷って悩んで色々模索するんだな(^o^)」

半分どころか、完全に疑ってます。って言ったら怒られるだろうな
あ。悩むと言うより、ただただ単語や公式を覚えるのに必死なんだ。
模索どころか何処へ進んでいるのか分からないんだよ。。。

ホント迷える子ヒツジだよ。

っていうか僕ヒツジじゃないし・・・亥だし。。。

そして、運命の期末テストの日が来たのです!!!（っという
かどんな運命なんだ？）

第4話：スランプ（後書き）

はあ。。 やつとまた1つ書けました。 読んでいただきありがとうございます。
ざいます。

この先のイメージはあるのですが、どのようにピースを組み立てた
らいいのか、私も迷路の中さまよってます（笑）

第5話：快進撃

「夢のようだ…っとなんていう

しかし その”夢”とは具現化されていないモノ

全くとえにならないじゃないか？って
いつも僕は思っていた

そう思っていたハズなんだけど
恥ずかしながら…
不覚にも頭によぎってしまった

”まるで夢のような感覚だ”

思ってからハッ和我に返り

客観的にみる自分がある事に気がつき焦った

□

運命の期末テストが終わり、久しぶりにのんびり休みの日を満喫していた。

明日のテスト返却を、珍しくハラハラドキドキもなく待っている。
我ながらこの静かな気持ちに驚いている。

・

テスト返却とテスト直しの半日。

こうして解き直しをしても、以前のイライラがない。

素直に結果を受け止めて

素直に復習することが出来る。

教室内はまばらで、通路には期末テストの順位なんかが貼り出され
たらしい。

うわぁ！とか、うぉぁ！とか叫んでいるヤツがいるが、どうせ僕に
は関係ない話。いつものように机に向かって、ただテスト直しをし
ているだけだ。

そこにクラスメイトの山田が走ってやってきた。

「速人！見てこいよあるぞ！お前の名前！」

「あ？！何が？」

「今回の順位と上昇率ランキングだよ！」

今回の順位とは、もちろん運命の期末テストの総合点の順位表
上昇率ランキングとは、前回の…要するに中間テストと比較して、
どのくらい順位がアップしたか。もちろん抜かした人数分が最も多
い人がトップ。

まさか今まで一度も載ったことがないのに…まさか！

「えゝ！マジで？どこどこ…うぉぁゝ！ホントだ、初めてだよ
ゝ！」

まさか！あのうわぁ！とか叫んでいるヤツが何で叫ぶんだ？ウルサ
イなぁ。なんて思っていたのに、僕も全く同じじゃないかぁ？！
やっぱりそういうものなんだなぁ。つい感動して叫んでいるんだな
ぁ。

今日は部活もないし、母さんを驚かせてやろう！

「ただあゝいまあゝ」

「おかえり。さてはテスト良かったなあ？！見せて見せて！」

「いやあ、いい話と悪い話どっちから聞きたい？」

一度にいい話をして喜ばせて、後で怒られるのは嫌だから…勿体ぶ
らなきゃなあ。

「はあ？！やっぱり悪い方からじゃない？残る印象が違っし。」

「では。。数学は前回と全く同じ点数だったんだ。英語もイマイチ
だし。」

「はあゝ？！あんなに自信満々だったのに！」

そうなんだ、自信はあったけどダメな時もある。

まずは母さん対策の作戦成功！ってところかな？

よしよし、ここでいい話をドカゝン！といきますかあ。

「まあねえ。。。でも！！いい話もあるんだよ！理科や数学の幾何、
国語も良かったし！順位に名前が載ったんだよ！上昇率ランキング
にも50人抜いたんで名前が載ってたんだよ！スゴイだろ？」

「すごい！すごい！速人もいい感じに波が向いてきたねえゝ！セン
パイにアドバイスしてもらった甲斐あったね。」

その晩、布団に入ってもしばらくは寝付けなかった。

決して数学や英語が悪くてじゃない。

順位にも上昇率ランクにもダブルで名前が載るなんて信じられない
からだ。まさに夢のような出来事で、いまだに信じられないほどだ。

そうだ、明日部活に行ったらセンパイにお礼を言っておかないと！
そうかあ、あの時先輩が言っていたのはこういう事だったのかもし
れないなあ。あの時は迷路に迷い込んだような状態で逆に良かった
ってことは・・・いまなら、なんとなく分かる気がする。

よあし！この波もらった！

残るは3学期しかないけど、ここで一気に駆け上がり、登りつめる
ぞ！

なんだか肩の荷が下りたというか、目の前の道が霧が晴れてきて、
見えてきたって感じた。

別に勉強のコツっていうのは教えてくれなかったかもしれない。

ただ・・・各教科の問題を解く時のポイントと

『得意教科は、大事な得点源だから、とれるだけとって来い！満点
狙うくらいでな！』

『苦手な教科は、足を引っ張らない程度に努力すべし！発展なんて
欲張るな！』

基礎・基本の問題をいかにミスらずに、しっかり得点できるかが
カギだ！』

そうだよなあ。教科によってバラつきがあるということは、得意科
目と苦手科目の差がハッキリしているから、結果が返ってきた時の
落差に愕然として落ち込むんだからなあ。

現実をしっかりと見つけて、受け止めてから対策を練らないとダメだ
よなあ。

よあし！これからまた再スタートだな！

さてと教室だと落ち着かないし、部室で宿題でもするかな。

高橋センパイがきたら報告もしたいしなあ。

思い出したくもない中間テスト…やっぱり窮地から救ってくれた恩人だもんなあ。

「センパイ！高橋センパイ！この間ありがとうございました！今なら、なんだか分かる気がするんです。この前スランプだった時は、そんな状態でいいって言われた訳が。」

「おおー！速人も大人になったか？ああ？で、結果はどうだったんだ？見せてみるよ。」

そうだった！肝心の忘れてた。話さなきゃいけないことがいっぱい順番間違えた。

「あつ、はい。結果は。。こんな感じだったんですが・・・」

「おおー！！これはホントに思い切った感じで分かりやすいなあー！それで自分なりに分析はしたんだろうなあ？」

「はい。どうしてこういう結果になったか分析した結果、スピードが足りないってところに行き詰って、少しずつ頑張ってる場所です。」

「よしよし。そこまで分かって出来れば、もう先は明るいぞ！頑張るのみだな！」

「それから！初めて載ったんです。今回の順位表と上昇率ランキングに！ありがとうございます。」

良かった。またいつもの勢いにつられて忘れるところだったよ。

ようやく、これから自分がどのように向っていったら良いか、ハッキリではないけれど見えてきた気がする。

やっぱり、僕は僕らしく。。。だけど、新しい僕になって歩き出さなければ。

第6話：それは突然に（前書き）

今回から少し大きくなった速人です。高校1年生になりました。ちよつと大人っぽくなった気がします。

第6話：それは突然に

☐
ボクはボクであって 誰でもない

太陽は全てを照らす 平等に

感情は抑えきれない 隠していても

時間は止められない 絶対に

キミ ハ ダレ ？

ドウシテ ソコニ イルノ？

ナニヲ ミテ イルノ？

☐

生暖かい風が吹いている。

今は冬なのに：まるで春一番のような。

時は、いつでもみな平等に一定に過ぎている。

それは当たり前な話なんだけど、どうしてこんなにも駆け足で過ぎているように感じるんだろう。

僕は何も急いではいないのに。

あの頃の僕は、色んな希望をもち…色んな期待をつけて…日々新しい何かに向かって走り続けていたような気がする。

あれから3年が経ち、僕は高校1年生になった。

心も身体も精神的にも様々な面において成長した。

だけど、あの頃のような勢いとハツタリだけで自信満々に向かっていくような…ある意味無謀な？無鉄砲な？そんな生き方は間違っても出来ない。

それは大人に一步近づいたからなのだろうか？

もうじき年も明けて、いよいよ自分自身の中で描き続けてきた”その時”のために向かって作戦を練る時期に入る。

そして、再来年の今頃には最終戦直前になって、意気揚々としているのだろうか？

それとも、意気消沈としているのだろうか？

”その時”は怖いものなのだろうか？心地よい緊張感なのだろうか？

今の僕はとても穏やかだ。穏やか過ぎて何か物足りなさを感じるくらいだ。

かと言って何かを始めようなんて思わない。

何かを変えようと思わない。

とりあえず、いつものように部室に寄って可愛い…！？後輩の放送部員達の面倒でもみてくるか。

視聴覚室隣のボコボコになった扉の鍵を開けて入ってみた…

「誰もいないしい。仕方ない宿題でもやってるか。」

薄汚い空間には誰も居らず、棚にはカメラや機材、テープにファイルがズラリと並び、隅のデスクにはでっかいパソコンが2台並んでいる。

パソコンと向かい合わせの位置には、こちらも古めかしい応接セットがある。

その後ろには事務机が2つ書類の山の台となっている。またその山に隠れるように何故か流しがあり、小さな茶箆筥まであった。

速人は迷いなく応接セットにドサツとカバンを置き、腰を下ろした。

するとその時、丁寧に扉をノックする音がした。

普段ガサツな男子生徒しか出入りしない部屋には驚くべき出来事だった。当然速人も驚き、身なりを整え、のけぞっていた体勢を慌てて面接でも受けるように座り直した。

ゆっくり扉を叩く音がする。コンコン…

少し低めの声で速人は返事をした。

「どうぞお。」

「失礼しまあす。」と見慣れない女子生徒が恐る恐る扉を開けて入ってきた。

「どうぞ…見ての通り汚い部屋ですが。」

つと速人にしては珍しく、努めて笑顔で優しく声をかけた。

「あの…。生徒会の者なのですが、放送部ってこちらでいいんですよね。」

「はい。そうですよ。」

「来学期の予餞会のお願いで来たんですが。」

訪ねてきたのは自分の方なのに、やっぱり引き気味の調子で彼女は

話した。

「またもやフレンドリーな速人。しかも笑顔つきだったし。」

「大丈夫ですよ。怖がらなくても。まあこちらにかけて下さい。お茶でもいれますね。」

「ありがとうございます。でも、おかまいなく…。この書類に詳しい事は書いてありますので、ご覧になって検討してから生徒会までご連絡ください。…じゃあ失礼しました。」

慌てて丁寧に断わると、彼女はペコリとお辞儀をして部屋を出ていった。

速人は立ち上がって2、3歩近寄るような位置で止まり、話を聞いていた。そして、彼女が去った後も暫く扉を見つめたまま立ち尽くしていた。

退屈な毎日に柔らかな風が吹いた放課後、速人の中で何かが動き出した瞬間でした。

第6話：それは突然に（後書き）

放送部でも、私立だなあっと思わせる部室。を勝手にイメージしてみました。

第7話：せつなさ

□ こんなに空を 眺めるなんて

今までなかった。

他人の事が こんなに気になるなんて

今までなかった。

何も手につかない。とは

こういう時の事を指すのだろう。

まさか 自分がこんなに人間くさいヤツだとは…
花の散るのにも ため息をつく程せつない…

何かで読んだような

まるで自分が違う生き物になったように思う。

□

最近どうも調子が悪い。風邪ひいたとか気分がどうの…っていう感じではなくて、気がつくとボーッと宙を見つめて”あの時”の光景を思い出している。

あの時とは…先日放課後に一人で部室にいと、生徒会の女子生徒が来て「予餞会の協力要請」の手紙を持ってきた時の事だ。

自分でも可笑しな話だ。

名前も知らないし、ましてや生徒会の人間にだ！…なんで気になるんだ？！昔かららしいが、校内でも知れている程仲の悪い『放送部VS生徒会』

普段は生徒会の事なんて頭の片隅にも存在しない。

しかし、あんな子見た事ないなあ。外進生かな？

そう、ウチの学校は元々6年間の中高一貫だから、僕のような中学から上がった生徒を内進生と呼び…

高校から入ってきた生徒を外進生と呼ぶ。

だから、たいていは知らないヤツはいない。

よって、彼女は外進生だという可能性が高いってワケ。…だいいちなんで僕は分析しているんだ！？自分でも訳分らないぜ。

モヤモヤした状態は治まらず、気がつく冬休みに入っていて、冬期講習と部活の毎日だった。

しかも、その間もシツクリこないで僕はイラついていた。

年も越し、新学期の準備をしている時に、その謎は一気に解けた。

以前に話した通りにウチの学校は歴史が深い。平たくいえば古い。なので、校舎もアチコチ老朽化している。

新年早々、僕たちの部室がある建物建て替えになるので、引越しなければならぬ。

よりによって生徒会室の隣に引越すのだからオドロキだ！

ああ進級の中身が関わる大事な3学期なのに…揉め事に巻き込まれ

るのは勘弁して欲しいなあ。

ホント犬猿の仲なんだからあ生徒会とは。。。ハア。

始業式を目前にしたあの日：生徒会長の船橋先輩と先日のあの子が、楽しそうに話しながら階段を降りてきた。

僕は逆に新しく引越した部室へ向かう途中で階段を上がっていた。

それはすれ違う瞬間　ほんの数秒　なはずだが、今までにない胸騒ぎを感じた。

二人が何を話していたかなんて関係ない。あえて言うなら、すれ違いざまに耳に入ってきた会話も苛立たせた原因かもしれないが：

「資料見たくらいじゃ覚えきれないだろ？何でも教えてあげるから俺に聞いてよ。すみれちゃん。」

「ありがとうございます！じゃあ、お言葉に甘えて：たくさん聞いちゃおうかなあ？」

：いや、普通に考えてもヘンな内容じゃないんだけど。。腹が立った。

しかし、『すみれちゃん』と呼んでいた。愛称なのか名前なのか分からないけど僕は”嬉しい”と感じた。

もしかすると、きっと、たぶん、恐らく、絶対に……僕は君を好きになったに違いない。

第8話：ロミオ&ジュリエット

今朝はヤケに下から冷えるなあっと思ったら…雪が降っていた。
まあ仕方ない2月だし、雪も降るわなあ。

何気に学校が遅くスタートするかな？なんて期待をしたが、水分の多いこんな雪では地下鉄だって止まりはしない。
気を取り直して支度を始めた。

学校へ向かう道も、もう慣れたもので、寝ぼけていたって間違いないとどり着ける自信はある。

しかし、今日はすんなり行かなかった…っというより行けなかった。
僕の通う学校は台地の上にある…要するに長い坂を登らないと着かない。

しかも、今日はべちゃ雪が降ってて足元が滑りやすくなっている。
特に女子はキヤアキヤア喚きながら滑りながら固まって道を塞いでいた。

そんな光景を横目に僕は、うつむき加減に…両手はコートに入れて…ゆっくりと歩き進んでいた。

つとその時！目の前からの叫び声に眼を見開いた。

「きゃあゝー!!」

「えっ!?!」 ドサツ!ガシツ!

反射的に僕は両手を出して受け止めていた。

そう、僕は両手にしっかりとキミを抱えてしゃがみ込んでいた。

あの時は…ただ単に叫び声に驚いたわけでない。。。

僕はキミの声に驚いて…とつさに両手を出して助けていた。

顔を赤らめ、肩をすくめて謝るキミ。

「あつ！すみません。」

「いついえ大丈夫…ケガはない？」

僕の腕の中から見上げるキミを見て、口について出た言葉とは全く関係ない事を考えていた。

”なんてキレイな瞳をしているんだろう”

数秒の間になんて考えてるんだ！？って自分自身にツツコミ入れたり…頭の中はぐるぐる色んな風に展開されていた。

そして、二人して足元をとられながら、ゆっくり立ち上がった。

「はい。おかげで大丈夫…だと思えます。」

「それは良かった。でも、今日はこれからも気をつけてね。」

「はい！ありがとうございます…あつ！」

お辞儀をしながらバランスを崩してよろけてしまい、僕は直ぐに両手で両肩をガシツとつかんだ。

そこで一言付け加えた。

「エスコートしますよ（笑）」

キミは下を見たまま…耳まで赤くなって、ただ黙って右手を差し出した。

そして、僕も黙って左手でしっかりと握りしめた。

しばらくは沈黙のまま歩き続けたが、しゃがんだ時に濡れた制服が張り付く様に冷たくて…たぶんキミも同じだろうと思ったので、思い切って聞いてみた。

「制服…濡れちゃって冷えるんじゃない？大丈夫？」

「はい…ちよつと。でも大丈夫です。」

「じゃあちよつと止まって…はい！これで少しはしのげるから。」
とコートを脱いでかけてあげた。もちろん、これでしのげるとは

思っていない。しかも、相手がキミでなければここまでしない。

そう、初めから手なんか出さなかったかもしれない。

いや…仮に出していても、”ケガはない？”なんて聞いてない。

全てにおいてキミじゃなきゃ。。。僕はこんなに優しくない。そういうところは”父親そっくりだわあ”っと母さんに最近よく言われるから。

数日後：久しぶりに部室に顔をだした。

来月の予餞会の為の打ち合わせをするらしい。

いつもは後輩に任せてしまふのだが、今回はかりはそうも言ってもらえない。

「仕方ないなあ。たまには指揮とってやるかな。なんせチーム組むのがアノ生徒会だからなあ。」

などと言って予餞会メンバーに自分から名乗りでた。これも全てキミとの接点が欲しくて…というのは言うまでもない。

そして、勿論その事を知っているヤツは誰もいない。

しかし、さらに数日後の生徒会・放送部合同の打ち合わせで僕は驚くこととなる。

打ち合わせが行なわれる会議室に入ると、数人から鋭い視線を痛いほど感じた。

元々生徒会とは仲も悪いし…とりわけ僕は理詰めで攻めるので、いつだって目のカタキにさせて慣れている。が、今日は違うのが直ぐに分かった。

打ち合わせは、気持ち悪いほど…意外にも予定通りに進んだ。

先生方も、みんなも、安心した面持ちで帰り支度をしてバラけていった。

例の生徒会長と僕が残った。最後の戸締まり責任者としてだが…向こうサンは違う用件らしい。

誰も居なくなると、いきなり捲したてる様に話してきた。

「放送部のクセに…っというより、放送部だから口が巧いのか？」

お前、何が狙いなんだ！

何の理由で塚本さんに近づいたんだ！？」

「は？何の話です？」

僕が何かしましたか？

しかも、塚本さんとは誰です？」

「とぼけるな！！見てたヤツがいるんだからな！」

お前と塚本さんが一緒に登校してくるのを！」

生徒会メンバーの誰かが、先日の登校ツーショットを目撃していたらしい。

会長は顔をだんだん赤くさせながら怒り出したので、僕は少し挑発してしまった。

「ああ。別に何も狙いなんてないですよ。

理由もないですしねえ。

ただ、強いて言うなら”僕は彼女が好き”ってことですかね。

それとも…生徒会長に断ってからでないと交際って出来ない規則なんですか？」

「なんだって！？」

「他に話がないなら…僕、帰っていいですか？じゃあ、お先に失礼します。」

廊下に出ると、あの時と同じように、耳まで真っ赤になってうつ向くキミが立っていた。

完全に聞かれたな…と思い話しかけてみた。

「一緒に帰らないか？」

聞こえてたと思うけど、キミにはきちんと話したいから。。。」

「……………」

キミは黙ったままゆっくりうなずいた。

それから、あの時の坂道を二人並んで、ゆっくり下って…駅まで来てしまった。

まさか今日こんなカタチで告白するとは思っていなかったから、シユチユエーションを考えてなかった。

歩きながら頭の中は、この後の展開を考えてフル回転だった。

たぶん、大した事ない自己紹介的な話を話していたはずだが、ハッキリ覚えてないくらいだ。

駅周辺にある神社の境内にきた…

「今日はいきなり驚かせてすまなかった。

だけど、僕は初めて会った時からずっと気になって…ずっと好きだった。

そう、キミが部室に訪ねて来たあの時からずっと。」

「えっ…あっ、はい。

私…えっと…私もで…うんえっと…」

キミは慌てて、上手く言葉を見つけれない様子だった。

そんな姿が可愛くて、とても愛しくて…壊さないようにそっと優しく抱き寄せていた。

「キミの口から、キミの名前を聞きたいんだが…教えてくれるかなあ？」

「はい。っ…塚本…^{すみれ}董です。」

「キレイな名前だ。すみれさん。」

ゆっくりと離れて向きなおり話を続けた。

「キミのいる生徒会では、僕は目の上のコブな扱いなはずだ。困った事があつたら話して欲しい。必ず策を考えて解決してあげるから、安心してくれ。」

第8話：ロミオ&ジュリエット（後書き）

試行錯誤して書いてます。ご感想などありましたら宜しくお願いします。励みになります。

第9話：奇跡をおこそう

『今までの僕は 飼い猫のようだったかもしれない

決められた範囲で ただ自由に意気がるだけだった

表面的なクールさを カッコよさと履き違えて

人に優しくすることを 弱い軟弱さと勘違いして

でも本当は違うことが分かった

表面的なカッコよさは 人を寄せ付けなくする

無口で無愛想な行為は 怖さと豹変する

今は困いを飛び出し ただキミを守るために戦う

知恵と勇気と愛を武器にして 今 奇跡をおこそう

□

高校3年生が卒業して、一学年分生徒がない学校は、心なしか広く感じる。

先週の予餞会の合同打ち合わせ後の一言が……僕の宣戦布告が効いたのかもしれない。

彼女に対して、船橋先輩からの嫌がらせなど何もないようだ。ある意味、生徒会長っていう肩書きで近づいていたわけだから、敗北を認めたっていうところだろう。もう近づき様がないって訳だ。もちろん生徒会として行事関係などの仕事での会話のみ……らしい。

おかげで僕達の距離もグツと近づけられて急展開の連続だ。

勇気を出して僕に詰め寄った船橋先輩としたら、玉砕して失敗した……と落胆していることだろうけど、僕達としては好転する有難いハプニングとも言うべきチャンスだった訳だ。

打ち合わせや前日準備・当日の担当など

一緒に仕事が出来る機会も増えて、会話も増えた。

僕としては、いつそのこと生徒会をやめて、放送部に来て欲しいくらいなのだが。。なかなかそうもいかないらしい。

その前に、放送部には女子生徒が何故かいない。

入ってきてても暫くすると辞めていってしまうのだ。

よく聞いてみると……

「先生がコワイ。先輩もコワイ。」

「時間が不規則だ。」

「部室がキタナイ。」

「肉体労働が耐えられない。」

……肉体労働って？と思うが、何かとある。

・機材を運ぶ

・学校行事などの会場準備の手伝い

一番多い意見ではこの2つがとにかく大変だと言われる。

他にも挙げたらキリがない。

まあとりあえず、予餞会も盛大に行われて、無事終了した。評判も大変良かった。

先生方も先輩方も口をそろえて言うことは

「こんなに生徒会と放送部がスムーズに協力しあって行われた予餞会は初めてだ!!」

つと驚きの言葉がほとんどだ。

いやあ。。なんたつて僕が総指揮執ってるから、誰にも文句は言わせない。

もちろんみんなの意見を取り入れ、前年までの反省点は全てクリアにしている。多少文句を言ってくるヤツもいたが、全て僕がきちんと噛み砕いて説明して対応していたので解決。

今回卒業される放送部の先輩方からもメールをいただいたり、廊下などでお礼を言ってくれた。

一つ年上だが、久しぶりに僕の師匠とも言える高橋先輩からもメールが来た。

『来年の予餞会の総指揮もお前がやれよな！そして、今年以上に盛り上がるように仕掛けること！なんてつたつてオレらが卒業する時だからなあ。』

それから、もう一つ。オレに紹介しないでお前つてヤツは!!! 彼女の話は今度たつぷり聞かせてもらうからな!』

はいはい。仕方ないなあ。来年も一肌脱ぎますかあ。大事な大事な恩師のハレの門出ですからねえ。

しかし、紹介つて言つたつて・・・親じゃないんだから何でセンパイに??? 訳分らないけど...

こつちの件も仕方ないかあ、今の僕があるのは高橋センパイのおかげだからな・・・

ほどなくして春休みが始まり。。。あつという間に過ぎて僕は高校2年生となった。

高校3年生は、もう部活に名前はあるものの受験体制で姿も見ない。高校2年生だって、上の上を目指している者は同様である。

僕だって本来ならそうしていたに違いない…。

だけど、実際の僕の日課は……先ず放課後になると部室で勉強。後輩達の仕上げる原稿チェックや段取りプランをチェックして、後輩育成指導。

17：00頃になると隣の生徒会室に董を迎えに行く。

悪いムシがつかないように視線で威嚇は忘れずに。だけど、もちろん口では丁重に挨拶して。。。

今年度に入って、表向きは和解されたような【生徒会VS放送部】だが…まだまだ高校2、3年生は微妙に温度差がある。

まあ3年は先にもある通り、活動休止状態だけど。

それから、最近僕の中で考えているのは、この2つの団体を1つにして…中で部門別にチームを作り、相互作用と理解のもと行事やイベントを行った方が効率的に良いのではないか？つという事。

しかし、まだ垣根が高過ぎて無理かな？

ただ、連休直後の生徒会長選出選挙で理解者に世代交替すれば話は別なんだがなあ。

また今日もそんな事を考えながら生徒会室の隅に立ち、彼女の帰り支度を待つ。

「お待たせ…」

「お疲れさま。帰ろうか。」

これがいつものやりとり。

自然に交わす会話一つ一つや行為が心地よくて安心していられる。帰り道でお茶をしたり、ウィンドウショッピングしたり…少し前まで顔と声だけで、名前すら知らなかったのに、数ヶ月後にはかけがえのない人になっていいる不思議。

そんな不思議も今は大切にして、永遠に続くように願っている。

…4月も半ばを過ぎようとしたある日の帰り道
僕は彼女の発言に驚いた。

「私…今度の会長選挙、立候補しようと思うの。。ねえ、速人はどう思う？」

「えっ！？ちよつちよつと待って？キミが？」

「ええ。ヘンかしら？私が立候補しちゃ？」

色々考えて…速人の話す奇跡を起こせるのは、私達じゃないと出来ない？ってというか、私達なら出来るんじゃないかな？って思ったの。

…
確かに放送部は僕がまとめて…

生徒会は彼女がまとめれば…

僕達だって仕事はしやすいし、わざわざ周りに気遣う事なく色々な仕事や作業をしなくて済む。

しかし、生徒会長っていったら、普通に学級委員長やるのと訳が違う。

「ああ。え〜つとお……………よし！全面的に僕がバックアップするから安心していいぞ！だいたいイメージもあるから心配するな。奇跡は必ず起こすぞ。二人でな！」

「まってよお。まだなくてもないのにい〜。

でも、良かった！しばらく考えてて……いつ言おうか迷っていたから。こんなだったら早く話せば良かったわぁ。」

そう言っただけで彼女は笑った。その笑顔は今でも忘れないし……今も純粹なまま変わらない。

第10話：モヤモヤの謎（前書き）

上手く表現出来ない自分をはがゆいですが…速人も乙女心を分かっ
てほしいです。再び船橋先輩登場です。

第10話：モヤモヤの謎

『 近づくようで 離れてくようで

キミの笑顔は 心を温かくし癒される そして 全てのパワーになる
キミの言葉は 春の風のように爽やかで 僕の全てを包み込むようだ
キミのすべてを守りたくて 壊さないように 大切に思っている

いつになったら 本当の心を見せてくれるのだろう

疑問はいつまでも尽きないが 考えるのは もう よそう

離れているようで 近づいてくる

子猫から大人になったばかりの猫のようで

戯れているのか いつも 僕の手をすり抜けては

絡み付くように すり寄ってくる

キミの笑顔を絶やしたくないから 明日も一緒に歩いてゆこう

彼女はいつも簡単に……いや分かっているはずだ、大変だということ
を。

僕のうぬぼれなのだろうか？彼女は僕の為を思つての決断だったの
だろう。

来月早々にある、生徒会役員選挙の”生徒会長に立候補する”とい
うのだ。

僕の為というのは、他でもない僕が考え続けている事。”放送部と
生徒会”のあり方についての構想だ。

しかし、そう上手くいくかはやってみないと分からない。

しばらくすると、彼女は生徒会役員選挙の準備と自分自身の立候補
者としての行動とで忙しくなっていた。

僕もしばらく親身になって勉強していなかったツケがきていたので、
図書室に籠るようになっていた。

帰りは今までとは逆に、彼女の方から図書室にやってくる。……今
度は僕が身支度をする。

会話はいつもと同じだが、発するのも逆で

「お待ちせ。」

「じゃあ、帰ろう。」

また時には

「ごめんなさい。今日は長くかかりそうだから、いいよ、先に帰っ
ても……」

つと、言いに来る事もあるが、もちろん僕は帰ったりしない。
そんな時は、一緒に部室と生徒会室のある2階へ下りてゆく。

僕はそのまま放送部の部室に籠って続きをやりながら、彼女を待っている。

そして連休もお互いの予定がズレて、1日しかたっぷり会えずに終わった。

それも映画を観に行き…お店をフラフラと見て歩き…っとフツの休日って感じだった。

いよいよ選挙が行われた。

普段の人望や人徳のある彼女だから、圧勝で当選!!!
当然のようだが嬉しい。良かった。やったあ！これでやっとまた今までのような楽しい日々が待っている!!!と思っていた。

しかし、何かシクシクこない何かがある。

楽しかった毎日に慣れすぎてしまったのだろうか？
だとしたら贅沢な悩みだなあっと怒られるに違いない。

それとも、慣れない”優しい僕”を続け過ぎて少々疲れてしまったのか？

っとしたら、嘘の僕を演じていた事になってしまふ。。。

そんな自問自答的な日が数日過ぎて…自分自身に苛立ち、それが顔にも出始めていたのかもしれない。っと思っていた矢先の出来事だ。移動教室で音楽室から教室へ帰る途中、渡り廊下でまるで待ち伏せしているように立っている人がいた。一つ年上のわりに小柄で、見るからに優等生タイプのその人は…前生徒会長の船橋先輩だ。

『最近、引き継ぎで塚本さんと話していて何となく元気がないんだ。

初めは疲れているだけかと思ったが、今ハッキリ分かったよ。

今のお前のその表情^{かお}じゃあムリもない、半年前以上の【氷りの速人】に戻っているからなあ。

怖がって誰も近寄っては来るまい。

ましてや、慣れない会長の仕事で疲れている塚本さんなんて可哀想だ。

今では自分自身を後悔しているよ。なぜあの時もっと喰らいついていかなかったんだろう。ってなあ。

まあこれからお前は心配するな。俺が塚本さんを守ってあげるからな！』

そういうと船橋先輩は走り去るようにいつてしまった。

声を掛けるもなく、いきなり話しかけてくる？というか、いきなり感情をぶつけてくるあたりは前回と同じだな。

しかし、指摘された内容は悔しかったが、自問自答のモヤモヤした何かを的確に核心についている言葉だっただけに、僕は呆然としたまま立ち尽くしていた。

チャイムが鳴り響き我に返り、慌てて教室までダッシュした。

その日の放課後は、部室ではなく直接彼女の教室へ向かった。

それもただ早く顔を見たくて、早く謝りたくて、早く！早く！と気持ちばかりが先へ行っていた。僕は会って何を話すかなんて考えていなかった。

たぶん恐らく船橋先輩の一言が頭をめぐっていたから、今日は生徒会室に行かせなくなかった。

彼女の教室へ着くと、目で探すよりも口の方が先に言葉にしていた。

「すみれ〜！すみれ〜！！」

当たり前だが、一瞬にして皆が振り返るほどだった。

彼女は窓際の真ん中ほどの席で、帰り支度をしている手をそのままにこちらを向いていた。

その表情は驚きとも悦びとも悲しみとも何とでもとれる様な複雑な視線で、じっと僕を見つめていた。

彼女だけがくつきりと…はつきりとしていて、周りの景色なんて見えてなかった。

教室の出入口と窓際までの距離がもどかしくて、はがゆくて、足が勝手に走り出していた。

そして、左手に彼女のカバン。右手は彼女の左手を取ると、今来た方向に走り出した。

「とにかく行こう！」

「えっ？ なっ何？ どうしたの？」

僕の中でも何が何だかわからなかった。

だけど、誰かに彼女を奪われるのが嫌だった。モヤモヤしてる何か嫌だった。もうこれ以上距離を感じるのが嫌だった。

彼女を離したくなかった。

とにかく誰もいないところへ行き、彼女に伝えたい！きちんと話したい！謝りたい。っと思いつながら走るうちに…知らず知らずのうちに、屋上へ向かっていた。

屋上に着くと、僕の特等席へ連れて行つた。最近あまり来ないが、時々考え事をする時にくる場所だ。風があまり来なくて…日だまりになって…眺めがいい。右側は主にコンクリート・ジャングルだが…左側は近所にある大学の森や寺社仏閣を守るように緑が囲んでい

る。

二人とも走り続けて呼吸が早い。だけど息を切らしながらも、先に切り出したのは彼女だった。

「…ねえ、……どっ…どうした…の？急に…」

「…ごめん。今まで…ずっと…ずっと、ごめんな。気づいてやれなくて。でも、大切なんだ。だから…だからごめんな。」

だんだん息も落ち着いてきたが、全然頭の中がまとまらなくて…きつと彼女の頭の中も

「？」が巡っていたに違いない。

「えっ？何が？どうしたのよ。速人らしくないよお全然分からないよお。」

「キミが、すみれが大変な時に全然気遣ってやれなくて、寂しい思いさせちゃって、ホントすまなかった。」

それでも彼女はピンときていない様で、目を丸くしていたかと思うと…いきなり笑いだした。しかも涙を流しながら、お腹を抱えて笑いが止まらないほどだった。

今度は、僕の方が目を丸くしてしまった。

色々悩んで…船橋先輩には宣戦布告のような事を言われ…

日頃頭を下げない僕が、仮にも【氷りの速人】とも呼ばれる僕が謝ったのに…！…！笑われた。

なんだったんだ！今までの違和感は…！！！！

今までのモヤモヤや悩んだ事。

船橋先輩にいきなり言われた事。などなど話したらたくさん出てきた。

そして全て話終わると彼女は優しく微笑みゆっくり一言いった…

『ありがとう。。速人。』

第10話：モヤモヤの謎（後書き）

なんとか10話までできました。感想聞かせていただけたら嬉しいです。

第11話：奇跡を起こしたら……キミは（前書き）

今回は、長いです。はい。おそらく熱のせいでしょうか？38.8
度まででした…薬で下がるとケータイうち続けてましたから（
| ^ ; ）

第11話：奇跡を起こしたら……キミは

☐ 今までは

信じられるものは 自分だけだった

信じようとも 思わなかった

過去に 何かがあったわけでもなく

自然と そうなっていた

遺伝 という ヤツだな

キミと出会って

信じるものが 増えた キミの事だ

ほかは どうでもいい とは言わないが

考えの対象ではないのは 已然として変わらず。。だな

初冬に キミと出会い

流れる時間ときにまかせて ゆだねて

同じ場所で 同じ時を刻んでゆく

今までにない感覚・感情を キミをとおして 知った 』

春の風が心地よい

屋上で遮るものがないせいもあるだろう。

そして、全てを受け入れるような微笑で見つめているキミがそこにいる

それが一番の心地よさだろう。

『ありがとう。速人』

さっきの笑顔とはまた別の優しい微笑みでの一言は

それまでの心の霧を一掃するのにはたやすかった。

まるで、母親のような眼差しで・・・僕をみつめている。肩の辺りで揃えた髪が、春風に吹かれては夕日に照らされて、透き通るような明るい髪色がキラキラと光ってみえた。

そう、情けないが『氷の速人』も完全に『春の堇』に溶かされてしまったようだ。

元気がなさそうな謎はハッキリ言ってくれなかったが、自分の中でもう少しまとまったら話すわあ。っとにごされた。

「それより今日は速人の中にある謎を解かなきゃでしょ！」

「あつ、いや。そうだけど...それはもう大丈夫だよ。さっき全て話

したし、なにより董の笑顔が見られたから、僕はもう大丈夫さ。」
でも、自分だけ謎が解けて彼女の謎が解けなきゃ…またしっくりこないのは当然な事。どうしても気になったので尋ねてみた。

「一人で悩むより、二人で悩んだ方がよりいいアイディアが浮かぶんじゃないかな？」

少しだけでもいいから、董の謎解きを僕にも手伝わせてくれないかな？」

目を細めて、気持ちよさそうに風をうけながらニコニコしていた顔が止まった。

淋しそうに遠くを見つめて、ゆっくりと深呼吸をして視線は遙か遠くを見つめたまま…まるで自分自身に言い聞かせるように、ゆっくりと一言一言を大切にするように話してくれた。

「うん…。ありがとう。だけど、私自身で答えを出さなきゃいけない…答えは分かってて、2つしかないの。そのうちどちらを選ぶかって事で迷っているの。。。」

「その2つのどちらかを選ぶ時に、僕の事が重荷になっているんじゃないか？だから話せないんだね。
もし仮にそうだとしたら、一つだけアドバイスしよう。」

目の前で今にも泣き出しそうな彼女をそっと抱きしめ優しく語りかけるように話した。

「まず、今の時代はメールや電話がある。しかもケータイなら外出先でも確認出来る。

移動手段も新幹線や飛行機だってある。

それから、董も知ってるハズだが、僕は日本史の研究者として生き

てゆきたいと思っている。だから、この周辺に常に生息しているという事になる。

……分かるねえ。」

僕の腕の中でコクンとうなずく彼女。

それを確認すると、僕はまた話を続けた。

「っということは、話を初めに戻すと…ケータイを持っていたらいつでも僕らはつながれるんだよ。肌の温もりは伝えられなくても…言葉で心の温もりは伝えられるから。

……分かるねえ。」

腕の中でコクンコクンと2回うなずく彼女。

すると今度は彼女の方が、そのままの状態で静かに話し出した。

「まだ、しばらく先の話になるんだけど…。父の転勤が決まったの。初めは父だけが向こうに行く予定。後から母と私達姉妹も向かうって。」

図書館で女子達が話していた語学留学の話かな？っと思っていた僕は、微妙に的が外れたので、努めて平静を装いながら、彼女の髪を2回ほど撫でた。

「ちょうど良い機会だから！と母は、語学留学の話を引き合いに出して…事あるごとに『生徒会長なんてやっていたら、語学留学の選抜テストはおるか、編入試験にすら通らないわよ！』っと言われ続けているの。」

やっぱりそうきましたかぁ。っと思ってしまったが、問題は違ったりころにあったのかぁ…っと思えば直していると、彼女は更に興奮気味

？いや興奮して話し続けた。

「そりゃあ、私自身、英語で進学する希望だし、留学の話はチャレンジしてみたいわ！だけど……だからといって生徒会長なんて！って全て分かった風に言わないで欲しいのよね……！」

「なるほどねえ。じゃあ堇は深呼吸して落ち着いてごらん？……いいかい？」

予測していた範囲外だったので、僕の頭の中をフル稼働させて、堇にいいながら自分自身にも言い聞かせていた。

「まずは…留学の話だ。堇はチャレンジしたいんだよね。ならば頑張ってみよう。」

次に、お母さんの言った言葉は、キミを心配しての言葉だから…生徒会長の話はたまたま同じ時期にあたってしまったからだよ。お母さんを責めてはいけないよ。いいかい？」

面白くなさそうだが、仕方ないかあつという顔でうなずいた。

「OK、じゃあもう一つ先に進むよ。堇は僕の事が好きかい？」

僕自身の中でも驚いたが、もつと気の利いた言葉で話すつもりだったんだが……あまりにもストレート過ぎたなあ。つと反省しつつ、まあこれが”僕”だから仕方ないかあ。

第11話：奇跡を起こしたら……キミは（後書き）

私の熱もやつと落ち着いてきて、最後を一気に書きました。速人：
なんというヤツなんだか……と思いますね。何か感想など改善点な
どあつたら教えてください。次への励みになります、宜しく願
います。

第12話：キミへの手紙（前書き）

なぜか私もドキドキしちゃっていたりします。

第12話：キミへの手紙

「この空をあなたも見ていますか？」

あなたには何色に見えていますか？

あなたの今は 朝ですか？ 昼ですか？ 夜ですか？

あなたの空は 晴れですか？ 雨ですか？ 曇りですか？

返事の見えない疑問は 次から次へと湧いては消えて・・・ 消えては湧いて・・・

また今夜も目を閉じて あなたに逢いにゆきます 明日も明後日も

」

「OK、じゃあもう一つ先に進むよ。堇は僕の事が好きかい？」

僕自身の中でも驚いたが、もっと気の利いた言葉で話すつもりだったんだが……あまりにもストレート過ぎたなあ。っと反省しつつ、まあこれが”僕”だから仕方ないかあ。っと自分勝手に納得してみたりする。

そんな僕の前では、彼女の目がパチパチして…みるみる頬を赤らめていって…唇が小さくパクパクして、まるで小さな金魚のようだ。

「ごめんごめん。だけど、これも董の謎解きの大切なキーポイントなんだよ。」

一応謝ってみるが…そんな動揺する仕草が、内心は微笑ましくもあり愛しくもあり、悪いなんてみじんも感じてなかったりする。

でも、自己分析する限り”怪しいオヤジ”みたいでヤバくないか？微妙に。。

「そつ、そうなの？……すっ好きだけどお、、だい・き・よお。。」

勢いよく聞いてきたものの、初めの勢いはどこへやら…だんだん小さい声になっていつてしまっていた。

「はい。よく出来ました（＾・＾）では、次は…来週からミッシェンを開始しよう！

まずは生徒総会で、一気に知らしめるカタチで【生徒会&放送部】を統合させる。」

「ちよつ、ちよつと待って！？それとさっきのキーポイントは何の関係があるの！……！」

「あるんだなあ。僕たちの知恵と勇氣と愛が、この学校の歴史を変えらるパワーになるんだよ（＾―・）」

いつも理詰めでいく僕にしては、かなり…いや、充分苦しいっていうかキザな展開になってしまったが善しとしよう！

「そんなあゝ！それだけじゃ足りないよあゝ！みんなの愛でしょ？」

「うつつん、まあそうなるかな？……っで、生徒総会で承認されたら、組織内の部門を整理したり色々動かなきゃならない。そして、

その動きがまとまる頃に董の選抜テストがあるはずだよね。そっちの方は頑張るんだよ！確固たる結果を出して、お母さんに実証するためにね。。。とこの辺まで謎解きをしたら、自分で難問も解けてきそうだろう？」

「うん。だけど、肝心の答えが出せないよお。速人の心が見えないもん！！私のストーリーばかりを組み立ててくれても、速人と別々の土地でいなきゃならない悲しみの問題は解決できないよ！」

僕自身、話したかった事も・・・彼女の気持ちの整理もついたらどうって事も・・・解決して良かったと感じた瞬間の爆弾発言というか大胆発言に驚いた。いやあ僕もストレートだけど、まさかキミもそんなにストレートとは思わなかった。今日最大の予測不能な大展開だな。

うつすら宵が迫ってきている空を背に、ためらいの微塵も感じさせずに僕の目をしっかりと真っ直ぐ見つめている彼女。

「OK・後者に対しての解決策は初めにヒントを言っただろう？いつでもつながれる。大丈夫、大丈夫さ。長い人生そういう時間も、神様が与えてくれた大切なプレゼントと思えば乗り越えられると思うよ。第一、今の董は若い。人生の中で一番キレイな時期なんだ。だから、もっと羽ばたいて世界を見ておいで。下手をすると僕は化石となって、キミに探してもらえなくなってしまうかもしれないよ。」

「そんなことないよ！！もし化石になっても、絶対に掘って掘って掘り返して速人を見つけてみせるわ！！」

「分かった。分かったよ、ありがとう。ぜひそうしておくね。それから、さっきの前者の質問だけど・・・僕の中では、去年の冬に初めて董が部室に来た時から、何一つ変わっていないよ。大好きだし・大切だし・愛しいと思っている。だから心配しないで、向いた未来へ行きたい道へ真っ直ぐ進みなさい。僕が出せる力を出し切ってもバックアップはするからね。」

~~~~~

そして、この学校の歴史を変える奇跡を起こして・・・キミは夢の扉を開く鍵を手に入れた。

『キミと初めて会った季節がまたやって来る。

だけど、それを待たずにキミは扉を開ける。いとも容易く…身軽に…そう、野原へ散歩にでも行くように。

いつも帰り際、胸の辺りで小さく左手をふる…あの仕草、もうしばらくお預けつてことかあ。

寂しいのはキミばかりじゃないだよ。口に出したら自分自身がどうなるか怖かった。キミを困らせてしまうし、壊してしまうかもしれないから。。。これで良かったんだ。

やはりちよつと意地悪な神様からの贈り物なのかもしれないね。有り難く頂いて、神様を見返してやろうじゃないか。意地悪な神様と僕達とどちらが我慢強いかな。

キミがこれを読んでいるということは、気持ちを揺るがす何かが起こったか…日本が恋しくなっただっていう事だね。

いつでも連絡してくれていいよ。僕はいつでも傍にいるから。

速人』

この後、彼女が校舎に姿を表すのは、更に一年と数ヶ月後の 運命的な出会いのきっかけとなるあの日から2年以上の 予餞会とそして、卒業式。だけになる…

代わって…速人の方は、二人で奇跡を起こした【生徒運営議会】の活動を全体的にフォローする立場に徹し、後輩指導にまわった。それ以外の時間は、あの時 以前と全く変わらない生活に戻った。そう、氷の速人に。。。どうやら中身はまだまだ年相応なのか？元来自身の事においては要領の悪い性格なのでしょうか？不器用な生き方しか出来ない人間なのでしょう。

そうそう、手紙は……つらくなったり、困った事が起こったり、悩んだりしたら開けるように。っと手渡されたのに！！！董は、飛行機の中で開いてしまう！

しかし、その後帰国するまでの1年間、手紙がボロボロになるほど見返されて、大事なお守りになって、彼女の支えとなっていた。何故かお互いに連絡は一切なかった。彼女が帰国する頃は、速人にとっても進学先の大学が決まる頃……苦しい時には相手もきつと辛いのだろう。…と思うてのこともかもしれませんねえ。

## 第12話：キミへの手紙（後書き）

一気に書きまわりました。頭の中で勝手に速人と堇ちゃんが発言してくれて……って感じで。

### 第13話：懐かしい仲間（前書き）

なかなかまとまった時間がとれず、ちよつとずつ書きためて…たり着きました。いよいよ速人も大学生になりました。夢まであとわずかです。

### 第13話：懐かしい仲間

『いつも僕は前を向いて歩く

6年前も同じように

晴れやかな気持ちと 慣れない制服

そしてしっかり前を向いて歩いていた

これからも 後ろは振り向かず 歩いて生きて行こう』

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

また、春がやって来た。

新しい環境に慣れないながらも毎日をごすのは新鮮で嫌いじゃない。

6年前はまだ小さかった僕、背丈は大きいとは言えない母さんと同じくらいだった。

今では、その母さんより30cmほど高い父さんと同じくらいか？更にデカく成長したか？っていうほどになった僕。

そう6年前は母さんが入学式について来てくれて、盛大なお祭りのような入学式に感動して泣いていたっけ！

さすがにこんなデカくなって恥ずかしいから辞めてくれ！って言うたが、きつと後から登場するのは分かっている。

今日はどうやら父さんも来る気配を感じた。

なぜなら、しきりに僕の服装チェックをしてきた。

普段は髪型や服装の乱れをチェックする程度だからだ。

僕の中では、父さんはカッコイイ歳のとりかたをしていると尊敬している。

もちろん、嫌な面だってある。

だけど、高校時代に母さんに『最近、良いところも嫌なところも速人は父さんそつくりになってきたわねえ。』と言われ始めてから…妙に意識して仕草なんかをチェックしてしまうんだ。

しかし、母さん迷子(?)にならなきゃいいが？心配だ。。

まあ子供じゃないからなんとかするだろう。

父さんも一緒ならまあ大丈夫だろう。つと言いたいところだが、都会に電車で出ると地図オタクのはずが、からつきしダメで方向音痴になるんだよなあ。

大人二人だ！なんとかするだろう……

広いキャンパスを講堂に向かってゆっくり歩いてゆく。昔、友達と来た。学部は違うが、公開体験講座に申し込み、男ばかり3人で来たんだったなあ。そして、7年後はココで再会しよう！！って約束したんだ。

あの時は、なんの根拠もなく今の歳をイメージしていたが、色んな事を頑張ったり乗り越えたりした今は、あの頃イメージ出来なかったとても大事なものがある。それは内面的な今の僕だ。とても晴れやかな気持ちと自信・充実感が身体中をいっぱい満たしている。

とりあえず、厳かに式も終わり…サークルPRの行列だ。

まあ焦る事はない、ゆっくりココでの生活に慣れてゆこう。僕のな

りたい夢に更に一步近づいたわけだから……ゆっくりと、しっかりと……っと自分自身に浸っていると、思いつき頭を叩かれた。っと同時に勢いある元気なっというより……ウルサイ声を浴びせかけられた。

「よぉ。速人だよな！」

やっぱり速人だよ。久しぶりだなぁ。

初めは分からなくて素通りするところだったよ。

また会えて良かったぁ嬉しいぜ！」

「……え？つあぁ！達也か？」

本当に申し訳ないが全然分からなかった。ただ……日に焼けた肌、細身のスーツ。ツンツン立てた髪型と早口でしゃべる話しぶりや目元などから突然思い出した！っていう感じだった。

達也は学校は一度も同じになっておらず、小学生時代の塾仲間だった。

他には直樹っていうヤツもいて、3人でつるんで騒いだり、勉強を教えあったりしてた仲間だ。

「え？達也か？って疑問符つきはないだろうよぉ！忘れたっていうのかよぉ……！」

散々苦楽を共にした仲じゃないかぁ……！」

懐かしい気持ちも沸き上がってくるが、やかましかったのと……シカトしても確実についてくるって分かっていたので、僕はただ黙って目をつぶり歩き出した。

「おいおい。今度はシカトかよぉ！直樹もそろそろこの辺りに来るはずだから、待てよ……！」



僕はピタツと足を止めて目を開けた。

そして、ついつい興奮気味になって捲し立てるように話してしまった。

「直樹もホントにココなのか?!

お前ら連絡とってたのか?

っていうかなんでこの辺りに来るって分かるんだよ!」

「ようやく口を開いたかあ(＾Ｏ＾)

なぜってこの先に史学科があるからさっ!

速人は必ずいる!! だからこの辺りで待ち合わせっていうか待ち伏せしよう! って事だったのさ! …… おお噂をすればなんとやら」

どうやら僕の後ろから来ているらしく、達也が少し頭を右に傾け遠くを覗いた。

つられて僕は後ろを振り向いた。

相変わらず坊っちゃん育ちの直樹が、爽やかなアーガイルのベストにベージユのジャケットのいかにも坊っちゃんスタイルでヘナヘナと走ってきた。

「達也あゝ! いたいたあ… やつと見つけたよお二人ともお… ハア… ハア…」

「お前、直樹か? デカくなったなあ! 6年の月日はやっぱり長いなあ。懐かしいや。」

「おいおい! 俺の時とは全然リアクション違い過ぎるしい!! なんでだよ。」

久しぶりの顔ぶれが揃って、新しい場所で不思議なカタチの友情を携えてスタートしようとしている。

コイツらには何でも話せる。気兼ねなく付き合えて、ラクでいい。

長い間接点がなかったからって、コイツらなら直ぐに埋められる。

多少の食い違いが出て来ても、大丈夫。

っていうか、違う環境下で6年間も生活してきたんだ、多少の意見や感覚の違いは仕方ない。

『董、僕は大丈夫だよ。』

この様子だと、これからの大学生活もなんとか楽しく過ごせそうだ。

キミの方はどうだい？

系列の大学に進んだから、友達もたくさんいるだろう？

そんなに日にちが経っていないのに、懐かしく感じるよ…

また、たくさん話をしよう キミの笑顔のもとで』

心地よい風向きを感じながら、新しい場所・新しい生活・懐かしい仲間…とても好奇心をかきたてられるのが、背中からビンビンと感じている。

ただ、となりにキミだけがない。。。

自分自身で選んだ事なのに……

### 第13話：懐かしい仲間（後書き）

はあ。またちよつとずつ書きためていくと思うので、次回が計れませんが、頑張ります。よろしければ感想など聞かせてください。書くパワーになりますので…ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

## 第14話：堇の章へ春待月（前書き）

今回からしばらくは、堇ちゃんの紹介もかねて彼女サイドのお話で進めていきたいと思います。

6話あたりからのフラッシュバックになります。

あと、それから題の春待月というのは12月の師走以外の12月を表すいくつかの呼び方のうちの一つです。

## 第14話：堇の章へ春待月

『憧れと尊敬……』

夢と希望……

輝きと煌めき……

私の中にある 誰にも話せずにいる この想い

消してしまうなら今のうちに 誰にも知られずに終わらせたなら

何もなかったように また いつもの世界に入ってゆける

でも 貴方を見かけるたびに このまま何もなかったようになんて

……

ならば 神様 お願い チャンスをください

その時 必ず 絶対に勇気を出すから 助けてください 』

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

私、塚本 堇。16歳。高校1年生。

夢は、絵本作家になること。さらにチャレンジしてみたいのは、絵

本の翻訳。

4つ違いの姉と私。小さい時から本は私の友達でした。

元々転勤族なので、小学校の間でも3校。さらに中学に上がると同時に、父の転勤で都会へと移りました。

北の地方都市から、ビルばかり並ぶ都会へ……

環境も感覚も何もかも違い戸惑いました。

中学校では、地元小学校からの繋がりでグループは出来ていて、馴染むのには時間がかかりました。

そんなしがらみのない私立の高校に行きたい！っていう私の希望  
母校に行かせたい！っていう母の希望

……で、今の私がいる。

そして、入学して2学期を終えようとしています。

女の子ですから、恋も遊びも勉強もっ！と毎日忙しいけど楽しいです。

一つだけ悩みがあるけれど。。。

その悩みは、気になる人がずっといるんです。『松本速人くん』たぶん、彼は気づいていない。

何も接点がないし…クラスもちがう。

はじまりは入学後の『部活オリエンテーション』

放送部の紹介で、彼は他の2人の先輩と並んでステージに立っていた。

部活紹介でも先輩と引けをとらない、慣れた口ぶりで紹介していたし……長身でもあるし……

てっきり上級生かと思った。っていうか信じきっていた。

だけどその後ステージから下がると、どんどん近づいてくるし！！  
心臓がバクバクしちゃって息が止まってた。

私の脇を通り抜けると、最後の方のクラスの列に入っていたのを見て同じ１年生なのだと初めて分かった。

それから色々な行事やイベントでは先頭に立って動いている姿をみつめているだけだった。

結局この半年強で分かったのは・・・名前、クラス、部活、電車通学っていう事と、ウワサで【氷の速人】と呼ばれていること。

どうやら冷たくて、コワくて、ハッキリものを言うらしい。そして滅多に笑わない。

放送部でも、出席率や生活態度が悪いと部活出席停止にさせたり・・・辞めさせたりするらしくて異名がついたって聞いた。

私は結局文学部に入部した。部活の時間は、好きな詩や絵本など自分の作品を仕上げる時間として充てられて嬉しかった。

けど、やっぱりずっと気になって生活するには限界があって・・・そんな時！！

部活仲間の恵が生徒会にも入っていて、文化祭で生徒会の手が足りないから手伝って！って頼まれた。

その文化祭でも間近で彼を見るチャンスがたっぷり！！

なりゆきと文化祭のお手伝いの仕事ぶりから、１１月って遅い加入だけど・・・正式に生徒会メンバーに加わることになった。

そして、運命の日を迎えることになる・・・！！！！

１２月に入って、３学期に行う予餞会の話が出た。しかも放送部と合同で取り仕切らなければならぬ！！って事は

お話できるかもしれない？お近づきになれるかもしれない？ってい

う大チャンス

なのに生徒会メンバーは浮かない顔。

それもそのはず、みんなは【氷の速人】と出来るだけ近づきたくない。なぜなら、コワイ空気がイヤ。口調も厳しい。スケジュールがキツイ。

元々生徒会と放送部は犬猿の仲だっという事をココで始めて知った。シヨックだった。

『じゃあ、私とその予餞会の文書を届けてきましようか？』

と私が言った時、みんなの驚きの眼差しが一気に私へ集中した。その日は、生暖かい風が吹いていた。まだ冬なのに…まるで春一番のような。

多分これからの出来事を風が予告していたのかもしれない。。今ならそんな風に思える。

放送部の部室に着いてもソワソワして、なかなかノック出来なかった。

もしかして、彼が出てきて『は？誰キミ？ああそう。じゃあ帰って』とか

『聞いてないから、先生通してから来て。』とか

『じゃまだから…』とかヒドイ言い方されたらどうしよう（＜―＞）などなど頭の中をぐるぐる回っていた。

しばらくして勇気を出して扉をノックすると…しゅんとして誰もいないみたい。誰もいないのに緊張していた自分になんだか笑えた。。

とりあえずまた生徒会室に戻って…一息して出発！！今度は部室前



に到着して直ぐに扉をノックした。

そうしたら……！……！……！低めの声で彼が返事をするのが聞こえた。  
一気に心臓がドクドクいいだすのが分かった。

「どうぞお。」

「しつ失礼します。」

私は目を閉じて、深呼吸をして、恐る恐る扉を開けて入っていった。

「どうぞ……見ての通り汚い部屋ですが。」

最初私が心配していた予想とは180度反対の返答に驚いた。とっても優しい声で素敵な笑顔で話してくれた。

「あの……。生徒会の者なんですが、放送部ってこちらでいいんですよね。」

「はい。そうですよ。」

「えっと……。来学期の予餞会のお願いで来たんですが。」

当たり前だよ！ココが放送部だって表にも書いてあるのに……！頭の中が真っ白になって何しゃべってるのか分からなくなるくらいだった。

だって目の前に彼がいて、しかも二人つきりだし……！当たり前なんだけど……彼は私を真っ直ぐ見てるし！

私のためだけに微笑みかけてくれるなんて、もう死んでもいいくらいっていうかホントは死にたくないけど……。うーん、どうしようもないくらい幸せな瞬間だった。

「大丈夫ですよ。怖がらなくても。まあこちらにかけて下さい。お茶でもいれますね。」

「ありがとうございます。でも、おかまいなく…。この書類に詳しい事は書いてありますので、ご覧になって検討してから生徒会までご連絡ください。……じゃあ失礼しました。」

彼は立ち上がると2、3歩近寄り、傍のソファに右手を差し出し案内してくれた。

それがあまりにも自然なので危うく「ありがとうございます。では。。」と座ってしまいそうだった。もちろん彼を目の前にして喉もカラカラだったからお茶も欲しかったけどねえ。

だけど、緊張のドキドキが聞こえてしまうんじゃないかな？とか、こんなシュチュエーションで話が出来るなんて！嬉しすぎて顔が真っ赤になってしまってるんじゃないかしら？とか

頭の中が酸欠状態みたいにクラクラしてきちゃって、ほんの1mくらい目の前にいる彼に書類を手渡して、慌てても極力失礼にならないように丁寧に分断すると、いそいでペコリとお辞儀をして退室した。

部室の扉を閉めると手足が震えだすのが分かった。フラフラになりながら生徒会室に戻って、きちんと書類は手渡しした事を告げた。恵が「大丈夫？ 蕨、顔が赤いよ？ 熱でも出てきたんじゃない？ 今日ともう帰ってもいいよお。」と言ってくれたので、そのままフラフラと家に帰った。

家に帰っても、着替えもせずにはナヘナとベッドに腰掛けると、またさっきの彼がフラッシュバックされてクラクラしてきた。

少し落ち着いてくると、なんであの時「じゃあ一杯だけ。。」とか言っただけで来なかったのだろう？ そうしたらもう少し長く話することが出来たのに！！なんて思ったり・・・

でも、そんなずうずうしい子は嫌いかもしれないし良かったのかもしれない。なんて思い直したり・・・

真っ暗になっても部屋の電気をつけるのすら忘れてしまつくらい固まっていた。

第14話：堇の章へ春待月（後書き）

実は。。。こんなふうに堇ちゃんも思っていたんです。ってというか堇ちゃんの方が先に速人くんを見つめていたんですね。

やっぱり女の子目線は昔を思い出します。ハイ・・・遠い昔ですが。

第15話：董の章へ霞初月（前書き）

勢いづいたのでしょうか？董ちゃんバージョン第2弾となります。

## 第15話：董の章へ霞初月

『かすみそめつき 霞初月は新年を迎えた月で気持ち新たにすがすがしい季節

母は 昔の…若い頃の話をよくしてくれた

どんな俳優が好きだったとか

どんなファッションが流行っていて  
雑誌を真似て 色々楽しんだとか

もちろん…どんな恋をしていたかも

どこまでホントか分からないほどドラマチックな恋物語だったかを  
少女のような瞳で語る

私もいつかそんな風に

自分の娘に話せるのだろうか？もし仮に私が男の子だったとしても  
母は話してくれたかしら？

もし仮に私の子供が男の子だったら

私は話せるかしら？

『

\*\*\*\*\*

最近、恵に質問というか、”変わった”と言われ続けている。

「なんとなく、可愛くなっただけど、何か始めた？」とか  
「作品の雰囲気明るくなって、イイ感じになってきたけど、何かあつた？」とか

「よく笑うようになったねえ。イイことあつた？もしかして、彼氏  
ができたとか？」なんてところまで聞いてくる。

確かに自分でも”あの時”から変わった気がする。

前向きになったというか……気分が軽くなっただっていうか……  
何をするにも楽しんでできる気がする。

そう、あの時とは……生徒会の書類を放送部に届けた時の事。

彼はどんな風に感じたかしら？

まあ、恐らくただの生徒会から来た女子っと思しき見てないと思うけどねえ。

もしかしたら、もう顔も忘れているかもしれない。

そう思うと寂しい気もするけど……私にとって衝撃的な時だったのは  
変わらない。

私にとって宝物のような時間なのは変わらない。

だからいいの……彼が覚えてくれてなくても。。。

また一緒に行事の仕事が出来ただけで、私はとっても嬉しいから。

今回の文書の件では、色んな事が分かっただけでも収穫だわあ。

昔かららしいけど、犬猿の仲の『放送部VS生徒会』その事自体は  
シヨックだったし、普段は別々の仕事だけど、イベントや行事では  
一緒に仕事をする事が多い。。だから、恵に誘われて生徒会に入  
ったのは、今までからしたら一歩も二歩も前進したって感じ。

これからも時々話すチャンスがあるかもしれないわけだし……他の  
情報もゲットできるかもしれない。

そうそう、生徒会に入ってから知ったのは、彼は中学から上がってきた内進生…だという事。

中学時代から放送部では抜きん出て活躍していたらしい。

だから高校から入ってきた私なんか名前どころか顔も知らないハズ。

あんなこんなで浮かれているうちに冬休みに入っていて、冬期講習と文学部の毎日。

今まで体育の時間や移動教室とかチェックしていたから、短いとはいえ冬休みはツマラナイ。。。

早く新学期が始まればいいのに！！と密かに思っていた。

すると生徒会の新学期に向けての会議が、あと数日で新学期つていくくらいに召集がかかった。

なんとそこで重大な…びつくりニュースが発表された……！！！！

なんと犬猿の仲なのに、新年早々、色んな移動教室で使う部屋がある建物が建て替えになるので、生徒会室の隣に放送部が引っ越してくる…という事らしい。

船橋生徒会長はとつても残念そうにどんよりと話していた。

メンバーからは大ブーイングの嵐。

「来年度の進級が関わる3学期なのに…揉め事に巻き込まれるのは勘弁して欲しい。」…というのがメンバー大半の意見らしい。

中には別に直接コワさを体験していない人などは、嫌がりもせず傍観者のだった。私もそんな風を装っていたけども……内心はバンザイ¥（＾Ｏ＾）ノと飛び跳ねていたわあ。

その会議の後、船橋生徒会長から予餞会を初めとする、いくつかの資料を見せてもらった。

私は更に新学期が待ち遠しくなり有頂天になっていたかもしれない。その直後に大失敗をしてしまった。



船橋生徒会長と職員室に向かう途中で、話しながら階段を降りてゆき、誰かが逆に下から上がってくるのは分かっていた。けど…まさか彼だとは気付かず…っていうか気付いたのはすれ違う瞬間だった。確かにチラツと彼は横目でこちらを見た。しかも私が今までに見た事のない冷たい瞳をしていた。初めて彼をコワイと感じた瞬間でもある。。。

「資料見たくらいじゃ覚えきれないだろ？何でも教えてあげるから、俺に聞いてよ。すみれちゃん。」

「ありがとうございます！じゃあ、お言葉に甘えて…たくさん聞いちゃおうかなあ？」

こんなおバカ発言している時にすれ違うなんて！！！最悪最低！自己嫌悪で天国から地獄へ急展開の瞬間で、今でも泣き出したくなるほど思い出したくない過去だわ。

絶対に…望みは消えた。絶望的だわ！

今までの時を覚えていてくれたとしても、完全に今ので削除されたわあ。っと思った。

みんなが言うコワさってなんとなく分かる気がした。

その日は家に帰ってから泣いた。

翌日が学校でなくて良かったって思ったくらいに目の周りが醜く腫れ上がって、一日中部屋に閉じ込もっていた。

第15話：董の章へ霞初月（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想などありましたら、よろしくお願ひします。ありがとうございます。

## 第16話：董の章へ梅見月

『四季……』

日本は 自然とともに 生きてきた

つねに 自然を意識して 生活してきた

四季のほかに 二十四節気にじゅうしせつきが 僅かに残っている

”立春”も その一つ

人間は毎日の中で 季節感を忘れがち

そんな中でも 私は 花たちのように

自分自身で 季節を感じて 生きてゆきたい

『

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

天気予報では【雪】

季節は【雨水うすい】

………雪が次第に雨へとかわり、氷がとけて水となるころ。

そろそろ春一番が吹いて、草花が芽吹き始める。

そんなことをいっても朝はまだまだ寒い。

少し前に比べたら、全然気温は上がったけど、寒いものは寒い。

予報は当たり前朝から霰みぞれ混じりの雪が降っていた。

こんな日にローファーで歩くのは大変。

靴底がなめらかというか？ツルツルしていて、いかにも！っという雪とは最悪な相性だったりするからキライ。

そんな私を横目に姉は…… ロングブーツで通学するらしい。しかも遅めのスタートで……！！そんな時は大学生を羨ましく思う。

しかも、今日の占いではラッキーディでNo.1だった。信じられない！！最悪最低なのに……

何気に学校が遅くスタートするかな？なんて期待もしたけど、こんな雪では電車も遅れないだろうから、まずムリ（TOT）

仕方ない早く出発してゆつくり歩くかぁ……………。

やっぱり、今日はすんなり行けない…学校は台地の上にあって…長い坂を登ってやっと到着する。

しかも、今日は霰混じりの雪だから足元が滑りやすくなって…もうイヤ……！！

周りの子達は、固まりながらしがみつきあいながら歩いていた。だけど、私は自分だけ歩くのに必死でいっぱいだから、誰かと歩くななんてムリ。

大嫌いなこんな日も、私にとってホントに占い通りにラッキーな日になるとはみじんも思わず必死に歩いていた。

つとその時！私の右足が運悪くマンホールの上を歩いてツルリツ！と滑ってしまった。

「きゃあゝ……！！」

「えっ！？」 ドサツ！ガシツ！

しまった！っと思った時にはもう遅かった…自分の身体が後ろに倒

れてゆくのがスローモーションのように感じて……目をつぶって、しりもちをついて痛いハズなのに痛くない!?

ハツとして目を開けてみると目の前に彼の顔がアップでびっくり！おまけにみぞれ雪が髪にハラハラと降ってきていて、しっとりとしている。それがまたたまらなくカッコよくて見とれてしまいそうになった。

2秒くらい空白の間があった気がするけど、慌てて降りようにも緊張して身体が固まってか？道がツルツルしていてか？上手く立ち上がれない。その間も心臓はバクバクするし……恥ずかしいし……で頭の中は大パニック……！

「最悪！最低！穴があつたら入りたいとは、こういう時に使ったわぁ」とか頭の中のワタシが叫んでいたし。。。

「あつ！すみません。」

「いついえ大丈夫……ケガはない？」

そんな間もまた頭の中のワタシは

「今日の占いNo.1もあながちハズレてないかも？」とか言うてたりする。

そして、彼は手首をからげるように私のひじ下あたりをしっかりつかんで、ゆっくり立ち上がらせてくれた。

「はい。おかげで大丈夫……だと思います。」

「それは良かった。でも、今日はこれから気をつけてね。」

「はい！ありがとうございます……あつ！」

お辞儀をしながらバランスを崩してよろけてしまい、彼は直ぐに両手で両肩をガシツとつかんでくれた。

しかも……まあ笑いながらだったけど……嬉しいことにこんな一言まで言ってくれちゃって……！！

「エスコートしますよ（笑）」

私は嬉しさと恥ずかしさで顔をあげられなかった。だけど身体は正直なもので、ただ黙ったまま右手を差しだしていた。そして、彼も黙って左手でしっかりと握りしめてくれた。

しばらくは二人とも黙ったまま歩いた、さっき濡れたスカートが脚にあたり冷たかったけど、身体も顔もそれどころではないくらい、ほてりまくって熱かった。

ゆっくり歩く私達を追い抜く人達……転んだのが分かるのか？（濡れちゃってるから分かるよねえ）クスツと笑って通り過ぎる人もいる。視線が痛い。

そんな沈黙をやぶって彼から話しかけてくれた。

「制服…濡れちゃって冷えるんじゃない？大丈夫？」

「はい…ちよつと。でも大丈夫です。」

「じゃあちよつと止まって。……はい！これで少しはしのげるから。」

つと彼は自分のコートを脱いで、私の肩にかけてくれた。あつたかった。。。

それまでも心臓バクバクしていたけど、更に鼓動が速くなって、誰かに見られてないかドキドキするし、頭がクラクラしてきた。

クラクラしながらも頭の片隅で「どうして彼は助けてくれたの？」

「この間の冷たい瞳はなぜ？」「立ち上がらせてくれた後も、こうして手をつないで歩いているのは？」「たくさんの？が飛び交っていた。」

本当は優しい人なんだろうなあ。そう！本当はみんなに優しいんだよおきつと！！

それより、今日学校に着いたら幸せ過ぎて恵に悟られそうだよ。  
どうやってごまかそうかなあ？

それから一週間後の生徒会・放送部合同の打ち合わせでは……っていうか打ち合わせの後に、耳を疑うくらい驚くことを聞いてしまったの。。

その日は、打ち合わせが行なわれる会議室に入ると、なんだか冷たい空気がはりつめてしんとしていた。元々生徒会と放送部は仲も悪いから？っと思っていたら、隣の席に座った恵が「いつもこんな感じなのよ。イヤよねえこの空気。たえらんないよねえ。」っといひそひそと話してきた。

その後の打ち合わせは、予想と反してスムーズに予定通りに進んだ。先生方も、みんなも、安心した表情で帰り支度をしてバラけていった。

私も早く帰れるぞ！っと思つて廊下に飛び出した！んだけど、先週のお礼を彼にキチンとしなきゃ！っと思ひ直して廊下で待つ事にした。

まるで告白するみたいにドキドキしてきちゃってたけど、「この間は、ホントにありがとうございました。」って一言いえばいいんだから、別にへんな事ないよね？って自問自答してみたり……たぶん今日を逃したら、話すきっかけというかタイミングを逃しそうだなあつて思ったから。

中には船橋生徒会長と彼が残つて戸締まりして直ぐに出てくる。ハズ？！なんだけど……全然出てこない。

それどころか生徒会長の少し荒い声がしてビックリした。

「放送部のクセに……っというより、放送部だから口が巧いのか？お前、何が狙いなんだ！何の理由で塚本さんに近づいたんだ！？」

「は？何の話です？僕が何かしましたか？しかも、塚本さんとは誰です？」

「とぼけるな！！見てたヤツがいるんだからな！お前と塚本さんが一緒に登校してくるのを！」

生徒会メンバーの誰かが、先日 of 雪の日の登校ツーショットを目撃していたらしく、っというか二人で歩いたのなんてあの日一度きりだけだし。

しかし、なぜ？……なぜ彼があんな言われ方をしなきゃならないの？そうそう第一私の名前だっけ知らなかったじゃない？頭の中がまたまた？だらけで上手くまとまらないでいると……

「ああ。別に何も狙いなんてないですよ。理由もないですしねえ。。ただ、強いて言うなら”僕は彼女が好き”っということですかね。それとも……生徒会長に断ってからでないと交際って出来ない規則なんですか？」

「なんだって！？」

いやあ私だっけ頭の中で

「なんだって！？」って叫んだ。その証拠に目も口もポカンとまん丸く開けたまま直立した状態で固まってしまった。

「他に話がないなら……僕、帰っていいですか？じゃあ、お先に失礼します。」

え？？出て来ちゃう！！でもこの場を走り出してもみつかつちゃうよねえ。っとか考えているうちに身体も顔もどんどん熱くなっ



くるし、緊張で固まってくるし、息も上手く出来なくなってくるし、うつむいていた…っと思う。頭の中が真っ白になって、どうしていいかわからなくなっているところに彼が会議室から出てきて、足が止まった音がした。

「一緒に帰らないか？聞こえてたと思うけど、キミにはきちんと話したいから。。。」

「……………」

私は黙ったまま、ゆっくり少しだけうなずいた。

それから、あの時の坂道を二人並んでゆっくり下って…駅まで来てしまった。まさか今日こんな展開になるとは夢にも思っていなかったし、ただ先週のお礼を言おうと思っただけなのに！その後は歩きながら何か話していた気がする。大した事ない自己紹介的な事を話していたようだけど、全然覚えてない。どうやって靴に履き替えて駅まで歩いてきたのかも…その駅の近くにある小さな神社の境内にきたのも覚えていない。彼の言葉でビクツとして我にかえり、ここにいるのに気がつくほど真っ白になっていた。

「今日はいきなり驚かせてすまなかった。だけど、僕は初めて会った時からずっと気になって…ずっと好きだった。そう、キミが部屋に訪ねて来たあの時からずっと。」

「えっ…あっ、はい。私…えっと…私もで…うんえっと…」

身体中に電気が走っていくように彼の言葉が響きわたって、何て返事をしていいのかわからなくて…でも私もそうだけどそうじゃないって…もっと前からで、春からで…頭の中では上手く言葉がまとまらない上に彼にそっと優しく抱き寄せられたりしちゃったから！

！！息が完全にとまっちゃって失神しそうだった。

「キミの口から、キミの名前を聞きたいんだが…教えてくれるかなあ？」

「はい。つ…塚本…<sup>すみれ</sup>堇です。」

「キレイな名前だ。すみれさん。」

自分の名前をなんとか言って息をついた。女の子の友達や先生に「キレイな名前ねえ。」って言われたことはあるけど、男の子になんて言われたことないし、まして彼に言われたからか？この名前で良かった。。つと初めて思った。するとゆっくりと離れて向きなおり彼は真剣な瞳で話を続けた。

「キミのいる生徒会では、僕は目の上のコブな扱いなはずだ。困った事があつたら話して欲しい。必ず策を考えて解決してあげるから、安心してくれ。」

そう言い終わると初めて会ったあの時のように優しく微笑んでくれた。

## 第17話：堇の章へ花咲月（前書き）

今回は、上手く切れずに、流れもキチンと追いたかったので2月下旬〜4月中旬までになっています。それから、今まで速人サイドだったので見えなかった”堇ちゃんと恵ちゃんとのやりとり”も盛り込まれています。

## 第17話：董の章へ花咲月

『夢見心地とはこんな風？』

風が もう春ですよお って言っているよう

私も負けずに 春ですよお ってふるまうわあ

まだ信じられない これは 春一番のイタズラ？

いやいや それにはちよつと早すぎる

じゃあ 誰の仕業？ あの人の仕業？』

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

高校3年生が卒業して、最上級生はみな自宅研修期間になって、あとは予餞会と卒業式だけの登校になる。

一学年分生徒がいなくなった学校は、少し寂しく広い。特に親しかった先輩がいた訳ではないけど、なんとなく風通しが良すぎるっていう感じがな？

今でも信じられない……思い出しただけでもドキドキしてきちゃう。先週の予餞会の合同打ち合わせ後の一言が……更にその帰り道の出来事。。。

今まで、たいていの事は相談していた恵にも、彼の事だけは打ち明

けられないまま一年近く経って……雪の日事件はごまかせても、さすがにこれからは絶対ムリ。

だから、彼からの告白があった日の翌日、恵を誘ってみた。回転の速い恵には全てを悟られているはずだけど。

「久しぶりに……ウチに遊びに来ない？いつものシリーズの最新刊も貸したいしい。」

「いいねえ。生徒会の仕事も私の担当部分は予餞会の当日待ちっていう感じだし……文学部の原稿も今日提出したらOKだし……行く！行く！……それに、董の相談役としたら行かない訳にはいかないでしょう？」

そうだよねえ。彼の事以外は何でも相談にのってもらってるし……この学校の色々な事を教えてくれたのも恵だしねえ。

「あああ。やっぱり分かつちゃうわよねえ。」

「あははっ！そうじゃなくて、董が分かりやすすぎるのよお。何か考えてるな？って事くらいは分かるわよ。」

「ありがとう……めぐみい。ずっと前から話そうとは思ってたけど……」

「はい。はい。その続きは董の部屋でたっぷり聞かせてもらうから大丈夫よ。」

話したい内容が特別な人の事だけに、言葉がつまりそうになった。そんな事も察してか？話の途中で遮るように恵が助けてくれたようだった。

次の休み時間に、授業中に書いた手紙を渡しに行った。今日は恵に初めて話す事とだから一緒に帰れない事。を簡単に話して手渡した。

『昨日はありがとうございます。』

今日、クラスも部活も生徒会も一緒の多奈川 恵さんに松本くんの事を打ち明けようと思います。

もちろん学校ではなくて、私の家ですし、彼女はとても信頼出来るので大丈夫です。

なので、今日は一緒に帰れません。ごめんなさい。』

放課後は私の部屋で恵に春からの事を一気に話した。暮れの書類を渡しに行った時の事も…雪の日の事も…昨日の展開と帰り道の事も……そして、生徒会に誘ってくれた恵にはとても感謝している事。もちろん恵だから、雪の日あたりから薄々察していたようだった。

「そんなに自分の中で抱えていたんだあ。早く相談してくれたらキユーピッド役をしてあげたのに！」

「ええー！そんないいのよ！絶対実らないって思ってたから。」

「確かに女子を寄せ付けない目つきだしねえ。まあ、雪の日は絶対何かあったなあとは思ったのよお。慌てた様子で来たからさあ。でも何かどうしようもなくなったら相談にくるかな？いつもみたいにっ。そしたら急展開があって解決してたのね」

その後も打ち合わせや前日準備・当日の担当など一緒に仕事が出る機会も増えて、会話も増えた。

恵は応援してくれるって言いながら楽しんでいるみたいだし…

「いつそのこと生徒会をやめて、放送部に来て欲しいくらいだ。」

と彼はムリなのは承知の上で、冗談交じりに話すし…

私なりに考えて…男子ばかりの放送部に行こうとは思わないし…恵との仲を考えても生徒会を離れたくない。

その後、しばらくして吹く風も生暖くなり、心配されていた予餞会も盛大に行われて、無事終了した。評判も大変良かった。先生方も先輩方も口をそろえて言うことは

「こんなに生徒会と放送部がスムーズに協力しあって行われた予餞会は初めてだ!!」

つと驚きの言葉がほとんどだった。

まあ彼が総指揮を執ってるから、誰も文句は言えない?っていう感じもあるけど…

多少文句を言ってくる人もいたみたいだけど、彼がキチンと説明して帰っていった。

私がみても、全体的なイメージが頭の中にあるんだろうなあ。って思うくらいみんなに指示してて、上手くいかない時も次の策をちゃんと用意していてアドバースしているみたいだった。

だからそんな姿からはとても”コワイ”なんて思わなかった。もちろん真面目にやってないと厳しい言葉が飛んでいたけどねえ。

生徒会の中でも、当初のイメージからはずいぶん違っていた。

「なんか今までと違って、仕事がやりやすい。」

「キチンと生徒会じゅうかいの意見も聞いてくれる。」

「相変わらずスケジュール管理はキッチリしているが、動きやすくなった。」

などのいいイメージが残っていて好印象のようで私も嬉しかった。

そして、こんな雰囲気のままずっと続けばいいのになあ。って思っていた。

予餞会も終わって、一緒に仕事をする機会もなくなって少しだけ残念だけど…また来年度には一緒に仕事が出来ると思うと楽しみで嬉しかった。

あれからは、放課後はそれぞれのスタイルがあるから、朝の登校と下校時に話すくらい。

だけど、放送部の先輩に私を紹介しろ！ってメールで催促された。って少し困った様な口ぶりで、照れながら話してくれた。

そういえば、彼が照れるなんてみた事なかったかも？

ほどなくして春休みが始まり。。。

一緒に図書館へ行って勉強したり…

映画を観に行ったり…

短い間の休みだけど、とっても充実していた日々だった。

そう、その時初めて彼に本当の事を打ち明ける事が出来たの。

それは…春の部活オリエンテーションの時に貴方を見て上級生だと思った事。

でも直ぐに同級生と分かり意識してしまった事。

夏休みに文化祭に出展する絵本を仕上げていたら、恵に生徒会で手が足りないから手伝って欲しい。と誘われた事。

文化祭の仕事から貴方の近くにいられるかと思って生徒会に入った事。

あの日、生徒会の書類を持って行ったのは、私自身で決めて行った事。

彼は驚きを隠せない様子で、目を見開いたり…落ち着かない素振りがうかがえた。

最後に一言、

「全く気付かなかった。悪かったなあ。時間はかかったが、これからは僕らは一緒に歩いてゆこう。」って言うてくれた。

そして、私達は高校2年生になった。

高校3年生は、もう部活に名前はあるものの受験体制で姿も見ない。



高校2年生だつて、上の上を目指している人は同様でさっぱりとしている。新学期になると、文学部と生徒会に半々で出席して…決まって17:00頃になると生徒会室にいる私を彼が迎えにきてくれる。

予餞会からは、生徒会の中でもずいぶん彼を敵視しない傾向になってきたので、私も安心して一緒に帰ったりしている。

それから時々彼の構想を聞く事が多い。

『生徒会と放送部。この2つの団体を1つにして…中で部門別にチームを作り、相互作用と理解のもと行事やイベントを行った方が効率的に良いのではないか？』という事。

しかし、まだお互いの意識が違つて無理かな？ただ、連休直後の生徒会長選出選挙で理解者に世代交替すれば話は別なんだがなあ。』

私自身、いつも彼に助けられている。つてとても感じる。だからなんとかして彼の構想を実現させてあげたい！つて思っている。

そうとは言つても何をしてあげたらいいかなんて全く分からないけど……

でもいつもそんな堅い話ばかりしているわけじゃなくて…帰り道でお茶をしたり、ウインドウショッピングしたり…少し前までは、ただ見ているだけで満足していたのに！数ヶ月後にはいつも隣にいてくれる人になつていてなんて不思議でたまらない。

今は永遠に続くように願つてる。

…4月も半ばを過ぎようとしたある日の帰り道

私は思いきつて彼に話してみた、ここしばらく考えていた事を。

「私…今度の会長選挙、立候補しようと思うの。。ねえ、速人はど

「思う？」

「えっ！？ちよつちよつと待って？キミが？」

「ええ。ヘンかしら？私が立候補しちゃ？」

色々考えて…速人の話す奇跡を起こせるのは、私達じゃないと出来ない？っていうか、私達なら出来るんじゃないかな？って思ったの。

「

生徒会は私がまとめて…放送部は彼がまとめていったら…たぶんスムーズに解決に向かえるハズ？！なんだけどねえ。

その前に私が生徒会長にならなきゃダメなんだけどねえ。

いきなりの提案でやはり彼も驚いていた。

実は最近、こんな風に彼の予想してない事を急に言ってみせて驚かせたり、ドキドキさせたりが楽しかったりするの……だって、普段は力チツとしていて、機敏に対応している姿しか見ていないから、こういう素顔は私くらいしか見られないのかも？！って思ったら嬉しくて。でも時々ねえ

「ああ。えゝつとお……………よし！全面的に僕がバックアップするから安心していいぞ！だいたいイメージもあるから心配するな。

奇跡は必ず起こすぞ。二人でな！」

「まってよお。まだなくてもないのにいゝ。

でも、良かった！しばらく考えてて…いつ言おうか迷っていたからこんなだったら早く話せば良かったわあ。」

それから、もう一つ最近思う事があるの。なんだかこのまま二人で色んな事にチャレンジしていたら、なんでも乗り越えられそう！だなあ。って……しかも、そういう時間ってすごく楽しくて、気持ちよくって、自分自身が元気になれる！し、とっても充実しているなあって実感するの。

それも全て彼がいてくれるからなんだなあって感謝しているの。も

ちろん言わないでおくけどね。。。。

## 第18話：董の章へ橘月

「人は言葉で 気持ちを伝えることができる

だけど 言葉だけでは 上手く伝えられない

そして 言葉に依存しすぎて 誤解をまねく

だから 瞳をみて 気持ちを添えて 言葉にしよう

誰も 初めから上手くないかない

だけど 真剣な眼差し と 真実の心 と 丁寧な言葉

それを もってすれば 必ず伝わるはずだから

あとは あなたが 相手を 信じることだけに 努めればいい  
」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ここ数日迷って…でも私がまとめられるかなあ？いや！彼に相談しながらやれば絶対出来るわあ！！って思ってみたりしていた。それを初めて口にしてみた。やはり驚かれた。だって自分だって驚いた発想だなあって思ってたくらいだから分からなくもない。生易しい事じゃないって事くらい分かってるけど…私が”生きてる” ”ここにいる” 何かを自分なりにカタチに残したいっていうのも少しある。

それから絶対言いきれるのは、なにか彼の役に立ちたい。って事。  
まあ先ずは来月頭の”生徒会長に当選する”というのが先にありき  
なんだけどもねえ。

”放送部と生徒会”のあり方についての構想。

実現したら、二重になる仕事やお互いを行き来していた書類も省略  
することが出来るし…

解釈の相違もなくなって、精神的な部分も好転される。

第一、最低限の人数確保も確実なものになるから、仕事を細分化さ  
れて個人的仕事量が軽減される。

あつ！！なんか彼みたいな思考になってきてない？！やつぱりいつ  
も側でこんな風に聞いているから？頭の中の展開も似てきた？！（

^o^）

ん？でも……彼は何もないところから今の展開を導き出してきたん  
だからスゴいわぁ！それに私も参加出来るなんて嬉しいし、スゴい  
事なのかもしれないわぁ。

うゝんしかし、そう上手くいくかはやってみないと分からない。け  
ど大丈夫！！（^o^）……な気がする。

しばらくすると、私は生徒会役員選挙の準備と自分自身の立候補者  
としての行動とで忙しくなっていた。

彼は図書館で勉強したりしていたから、ちょっと自分自身おいてき  
ぼりをくったようで寂しかった時もあった。「何で彼の為について思  
っているのに私ばかりこんなに大変なの？！私だって勉強しないと  
ダメなのに！ズルくない？！」ってねえ。

単なる被害妄想なんだけどねえ。

帰りは、私が図書室に迎えにゆく。……今度は彼が身支度をする。ちよつとむくれた時やホントに忙しい時は

「ごめんなさい。今日は長くかかりそうだから、いいよ」先に帰つても……」

つと、言いに行く時もあったけど、もちろん彼は帰ったりしない。そのまま一緒に部室と生徒会室のある2階へ下りてゆき、彼は放送部の部室に籠つて勉強の続きをしながら待っていてくれる。

その後のゴールデンウィークもお互いの予定が上手く合わなくて、1日しかゆつくり会えずに終わってしまった。その1日も普段の日曜日のような感じで、特別どこかへ行くもなく近場でフラフラと過ごしていただけ。。まあ学生だから仕方ないのかもしれないけど、ちよつと残念。

その代わりといつては怒られちゃいそうだけど、恵とは久しぶりに雑貨屋さんめぐりに行ったり・・・スイーツの食べ放題に行ったり・・・楽しかったあ。

ゴールデンウィークが終わるといよいよ選挙が行われて……何故かこの私が圧勝で当選!!!出来ちゃったの。

さすがに恵と一緒に「やったあ!」って手をつなぎながら飛び跳ねちゃってた。。これからが大変なんだとは分かっていたんだけど、やっぱり嬉しいものは嬉しいからねえ。

でも、大変は大変でも何がどんな風に変なのかはさっぱり分からなかったから、前生徒会長の船橋先輩に色々と資料を見せてもらいながら教えていただいた。。けど、イマイチというか何となくポイントが分からない。

書記さんのノートを1年分借りて、家に持ち帰ってみたりした。一年間の流れやその時々にとのくらい前から準備にかかるのか?と

か、それぞれの行事の反省会でた意見など：膨大な量になっていったけれど、彼となら絶対に乗り越えられそう！！って思いながら自分を励まして資料とにらめっこの日々をしばらく過ごしていた。そんな生活も1週間か2週間も経つと頭がパンクしそうになってくる。誰か助けて！って言いたいけど代わりはいないし：最初のお仕事の生徒総会は近づいてくるし：どうにかして！って感じの日々を過ごしていたわ。

そんな中、家に帰れば母からまた父の転勤の話を聞かされたの。更に、学校で募集している語学留学生の話をタテに生徒会の活動を”そんなの”扱いされて……私自身をけなされた思いがして、親子ゲン力になったりもしたわ。

そうそう、【語学留学生】っていうのは、要は交換留学生で、向こうに1年近くホームステイしながら向こうの学校に通うの。但し、2つ条件があつて：『2学期にある選抜テストにパスすること』と『帰国後の進学先は系列大学に必ず入学すること』しかも選抜テストに通っても、男女それぞれの上位者5名ずつが留学生の切符をゲット出来るの。

はああ……母の言いたい事も分らないけど。理由が納得いかないのよ！

何でもそつなくこなす姉を持つと妹はツライわあ。何かと比較されて、母の考えを通される。そんな状態がイヤで環境を換えたかった。英語で進学したいから、留学も行きたい！自分なりに何も無いところから、どれだけの事が出来るか試してみたい！全く違う文化や環境の中でチャレンジしたい！自分自身をパワーアップさせたい！とか色んな事が絡んでの挑戦だったの。

そんな私を後押しして助けてくれたのは、やっぱり彼だった。それは突然で……って言うても、私達の出来事っていつも突然だけどねえ。今度も突然のハプニングでお互いを再確認出来たっと言っても過言ではないくらいだったわあ。

それは、来週か再来週には梅雨に入るのかしら？って話がささやかれる時期で……その日の放課後は、今まで充分休めなかったので、部活も生徒会も休んで、早めに帰ろうかな？って思っていた。

「すみれ〜！すみれ〜！！」

当たり前だけど、一瞬にしてクラス中が声のした方を振り返りざわめき出した。

私は窓際の真ん中ほどにある自分の席で、帰り支度をちょうど済ませたくらい。普段みんなの前では『塚本さん』ってさん付けだったのに？！名前で呼ぶし、しかも声が大きすぎ！驚かない方がオカシイ。たぶん口をポカンと開けたまま現状を理解できない間抜けな表情<sup>お</sup>を私はしてたんじゃないかしら？

彼は慌てた様子で教室に入ってきてグングン近づいてくるし、頭の中は？？？だらけ。気がつけば彼は左手にカバン、右手に私。連れ去られたような状態だった。

「とにかく行こう！」

「えっ？なっ何？どうしたの？」

どこに行くの？何が何だかわからなかった。だけど、不思議とコワさを感じなかった。掴んだ手もしっかりと握られてはいるものの痛くはなかったし。この非日常的な展開に何故か心地よさを感じるほど。ヘンな感じかもしれないけれど、私を気遣いながら連れ去って



いる？って思っただくらい。

そのまま屋上に着いた。ここは確か彼の特等席。桜が満開の時に初めて招待してもらった場所。風があまり来なくて…日だまりになって…眺めがいい。右側は主にコンクリート・ジャングル…左側は近所にある大学の森や寺社仏閣を守るように緑が囲んでいて緑が綺麗。

二人とも走り続けて呼吸が早い。だけど息を切らしながら私は彼に聞いてみた。

「…ねえ、……どうした…の？急に…」

「…ごめん。今まで…ずっと…ずっと、ごめんな。気づいてやれなくて。でも、大切なんだ。だから…だからごめんな。」

だんだん息も落ち着いてきたけど、謝られた意味がさっぱり解らなくて。何を「気づいてやれなくて」なんだろう？こんなにもいって優しいのに。氣遣ってくれるのに。「大切にされてる」って実感があるのに。どうして急に彼が私に謝るのだろう？？

「えっ？何が？どうしたのよお。速人らしくないよお全然分からないよお。」

「キミが、すみれが大変な時に全然氣遣ってやれなくて、寂しい想いさせちゃって、ホントすまなかった。」

真面目に、真剣に謝る彼の姿を見ていて……どんなに大変なことがあったのかと思って真面目に聞いていたら、私にとつたらなあ～んだって事で拍子抜けしてしまった。

そうしたら途端に笑いがこみ上げてきて笑ってしまった。日頃、冷静沈着で何事にも緻密な計画と裏づけの元行動して、【氷の速人】

と呼ばれるほど他人を寄せ付けられないような瞳でクールな彼が！慌て取り乱して…何度も謝っている。しかも最後に極めつけに”すまなかった”っていうのもオジサンくさくさって笑いを誘った。でも、最後の言葉の事はナイショにしておこう。お腹を抱えて笑って、涙を流しながら笑って、やっと落ち着いた。

その後、どうしてこんな事になったのか、今までのモヤモヤや悩んだ事。船橋先輩にいきなり言われた事。など一つ一つ順を追って彼は話してくれた。

そして全て話を聞き終わると、不思議と母親のような感覚になり自然と微笑みかけている自分がいた……

『ありがとう。。速人。』

## 第19話：董の章へ風待月

『揺らぐもの それは 波？ 風？ 焰？

そうねえ 波も 風も 焰も

ゆらゆらと 揺らぐもの かもしれない

しかし それらは 私にとって

キレイだなあっと思うだけで コワくはない

清々しいなあっと思うだけで コワくはない

あったかいなあっと思うだけで こわくはない

コワいのは あの人の心

そう 心は時と共に 変わるもの 揺らぐもの 褪せるもの  
』

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

春の風が心地よい…だけど、暦の上ではそろそろ初夏の範囲なハズ。  
しかし、今はそんなことは抜きにして、ただただ心地よく吹く風に  
二人で吹かれていたい。

『ありがと。。。速人』

いつも優しい彼に、まるで母のような気持ちと今私に出来る精一杯の気持ちを込めて贈った一言。

いつの間にかすっかり夕方になっていて、彼の濃い茶色の髪が柔らかくなびき…たくましい肩からやや下に視線を下ろすと…私の影が寄り添うように映っている。そんな影に少し嫉妬しそうなワタシがここにいる。ヘンだよ、そうヘンなんだけどちょっと頭の片隅で思った。

彼の話聞いた後は私が質問攻めにあつた。もちろん今日は早めに帰って、改めて自分に向き合って考えるつもりだったし…最初の展開からして彼の話がメインで、まさか自分にまで矛先が向かうなんて予想も計算もされてない……第一まだ自分の中で葛藤中なんだから、話せる状態ではないし…とりあえずその場はなんとかごまかした。ごまかせた？ハズ……でもやっぱり彼にはどうしても口で負けてしまう。。。っていうやり話のもっていき方のテクニクでは勝てないみたい……結局最後は全て話すハメになってしまった。

「自分の中でもう少しまとまったら話すわあ。それより今日は速人の中にある謎を解かなきゃでしょ！」

「あつ、いや。そうだけど…それはもう大丈夫だよ。さっき全て話したし、なにより董の笑顔が見られたから、僕はもう大丈夫さ。」

私の笑顔で直るなら、いくらだって笑っていてあげるんだけど…恐らく彼の中でも言葉に出して話したことですっきりしたんだと思う。っで、また私にふってきた。

「一人で悩むより、二人で悩んだ方がよりいいアイデアが浮かぶんじゃないかな？少しだけでもいいから、堇の謎解きを僕にも手伝わせてくれないかな？」

私が「イヤ！」なんて言えないのを彼は計算づくなんだと思うくらい。だけど、努めて丁寧に向うように話しかけてくる。

その言葉を聞くまで私自身、上手くごまかした！っと思い込んで…鼻歌なんかでそうなくらい、気持ちよく風をうけていた。

だけど、彼には勝てないって思った瞬間ブルーになったわあ。それに母の話をしなきゃならないかと思うと余計に滅入った。

ゆっくりと深呼吸をして彼の方は向かずに冷たいビル郡を見つめたまま…ゆっくりと話していった。

「うん…。ありがとう。だけど、私自身で答えを出さなきゃいけないくて…答えは分かかって、2つしかないの。そのうちどちらを選ぶかって事で迷っているの。。。」

「その2つのどちらかを選ぶ時に、僕の事が重荷になっているんじゃないか？だから話せないんだね。もし仮にそうだとしたら、一つだけアドバースしよう。」

そう言うと、彼は私をそっと抱きしめ優しく語りかけるように話してくれた。

「まず、今の時代はメールや電話がある。しかもケータイなら外出先でも確認出来る。移動手段も新幹線や飛行機だってある。

それから、堇も知ってるハズだが、僕は日本史の研究者として生きてゆきたいと思っている。だから、この周辺に常に生息しているっていう事になる。……分かるねえ。」

私は彼の腕の中でコクンとうなずいた。まるでそれを確認したかの

ように、僕はまた話を続けた。

「つということは、話を初めに戻すと…ケータイを持っていたらいつでも僕らはつながれるんだよ。肌の温もりは伝えられなくても…言葉で心の温もりは伝えられるから。……分かるねえ。」

腕の中でコクンコクンと2回うなずくと、それは不思議とすごく自然に…そのままの状態ですくすく話している私がいた。

「まだ、しばらく先の話になるんだけど…。父の転勤が決まったの。初めは父だけが向こうに行く予定。後から母と私達姉妹も向かうって。」

彼は無言のまま、相槌を打つかのように私の髪を2回ほど撫でた。

「ちょうど良い機会だから！と母は、語学留学の話を引き合いに出して…事あるごとに『生徒会長なんてやっていたら、語学留学の選抜テストはおるか、編入試験にすら通らないわよ！』つと言われ続けているの。 - そりゃあ、私自身、英語で進学する希望だし、留学の話はチャレンジしてみたいわ！だけど…だからといって生徒会長なんて！って全て分かった風に言わないで欲しいのよね！……！」

「なるほどねえ。じゃあ董は深呼吸して落ち着いてごらん？……いいかい？」

だんだん自分が白熱していった興奮していくのが分かった。だけど止められなかった。そんな時にちゃんと彼は一声掛けてくれて、彼なりのアドバイスをくれる。これは大抵二人で話している時のパターンとなってきた気がある。やはり今回もそのパターンだったわあっと何気に思っていた。

「先ずは…留学の話だ。堇はチャレンジしたいんだよね。ならば頑張ってみよう。」

次に、お母さんの言った言葉は、キミを心配しての言葉だから…生徒会長の話はたまたま同じ時期にあたってしまったからだよ。お母さんを責めてはいけないよ。いいかい？」

確かに彼の言うことも分からなくてもいいので、一応うなずいてみせた。。。。けど、その次に出た言葉はあまりに唐突すぎて・・・直球すぎて・・・

「OK、じゃあもう一つ先に進むよ。堇は僕の事が好きかい？」

第19話：董の章へ風待月（後書き）

いよいよ、董の章もあと2話かな？くらいになりました。速人も大  
きくなり、しっかりしてほしいです……。



## 第20話：董の章へ露隠月

「いつも あなたは 駆け足で

いつも 私は 背中を見ているだけで

なのに あなたは 気付かない…

それとも あなたは 気付かないフリをしているだけ？

たまには 私も 追い抜かして

あなたに 私の背中を 見つめさせたい

叶わぬ願いとは しりつつも…

今日も 必死に 策を練る ワタシ…」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「OK、じゃあもう一つ先に進むよ。董は僕の事が好きかい？」

いきなりでびつくりした。

なんでそうくる？次って？！もう一つ先って…話題全く違いますか？って言いたいけど上手く言葉にならないし、頭ん中真っ白で目はパチパチ…口は小さくパクパクさせちゃって完全に動揺しまくり！！

自分じゃ見えてはいないけど、絶対に完全に顔が真っ赤になっちゃったよお。

そんな私を見つめながら、彼は悪びれもなく微笑みを返しながら一応謝りつつ言葉を続けた。

じつくり考えてみれば、確実に彼の話術にハマっていた様にも思えるけれど、その時は全然そんなこと考える余裕もなかった。

「ごめんごめん。だけど、これも董の謎解きの大切なキーポイントなんだよ。」

「そつ、そうなの？……すっ好きだけどお、、だい・き・よお。。」

さすがに勢いよく答え始めたけど恥ずかしくなってきたちゃって、肝心なところの言葉が小さくなってるちゃった。

だって！だってまさかこんな展開になるなんて思ってもみないもの。。やっぱり完全にはめられたわあ。その証拠に次に話題に上ってきたのは生徒会と放送部の話で、彼の構想をいよいよ実現化させるためのアクションを起こす計画の話になっていったの。

「はい。よく出来ました（＾・＾）では、次は…来週からミッシェンを開始しよう！

まずは生徒総会で、一気に知らしめるカタチで【生徒会&放送部】を統合させる。」

突然私に好きかどうか聞いておいて、フツの話題だったかのようには生徒会と放送部の話や生徒総会の話へいつてしまつて…「はあ？」「って腑に落ちない人はいないはずだわあ。

さすがの私だってこの話のもっていき方には矛盾を感じたから、思いつきり話の途中で切り出してしまった。にもかかわらず彼の答えもサラリとしていて、なかなか一筋縄ではいかない上にまた彼の思

う方向へと進んでいつちゃった。

「ちよつ、ちよつと待って！？それとさっきのキーポイントは何の関係があるの！ー！」

「あるんだなあ。僕たちの知恵と勇氣と愛が、この学校の歴史を変えろパワーになるんだよ（ハー・）」

「そんなあー！それだけじゃ足りないよあー！みんなの愛でしょ？」

「うっうん、まあそうなるかな？……」つで、生徒総会で承認されたら、組織内の部門を整理したり色々動かなきゃならない。そして、その動きがまとまる頃に董の選抜テストがあるはずだね。そっちの方は頑張るんだよ！確固たる結果を出して、お母さんに実証するためにもね。。とこの辺まで謎解きをしたら、自分で難問も解けてきそうだろ？」

私の中でなんとか彼の思う展開を逸らさすべく、必至に切り返していつてるつもりだった。このまま私だけにドキドキさせておいて彼はそのままなんてイヤだったし、本当の彼の気持ちを言葉で聞きたかった。

そうそう、彼の気持ちは元生徒会長と話している時とその帰り道に神社の境内で聞いたけど、普段では全くなんともなく・・・大事にされているのは分かっていても、最近は特に実感としてはイマイチな時もないとは言えなかった。

それに心の中のワタシが『今訊かないでいつ訊くの？！』そんな風に言っている気がした。そう思ったら言葉はどんどん口をついて出てくるし、勢いにつて感情が止まらなくなって溢れ出していった。

「うん。だけど、肝心の答えが出せないよあ。速人の心が見えないもん！！私のストーリーばかりを組み立ててくれても、速人と別々の土地でいなきゃならない悲しみの問題は解決できないよ！」

やっぱり彼の中の展開のパターンには私が・・・っというより、ワタシという感情がどんどん口について表現化されてゆく様子は計算されていなかったはずで、戸惑いを隠せないようだった。またもや他の人には絶対に見せない彼の困った表情を見られて内心ラッキー！！って思ったワタシがいた。それと同時にどんな返事が返ってくるのか？不安がないわけではなかった。今日ここへ連れてこられた事を考えたら、決して良くない返事とは思えないけれど・・・恋をする自信を失くしてワガママになる。だから、相手が気になって仕方がないのかもしれない。

初めのうちは見ていられるだけで嬉しかった。話が出来る範囲にいられる現実が嬉しくなって・・・度重なる偶然にときめいたりしたやがて彼の気持ちを知り、となりに居られる事が現実のものとなった。するとそんな現実慣れてしまい、甘えが出てきて・・・ふいに寂しくなって不安になる。だから、不安を蹴散らして、必至に負けまいとして彼の目をじっとみつめてしまう私。

「OK・後者に対しての解決策は初めにヒントを言つたろ？いつでもつなされる。大丈夫、大丈夫さ。長い人生そういう時間も、神様が与えてくれた大切なプレゼントと思えば乗り越えられると思うよ。第一、今の董は若い。人生の中で一番キレイな時期なんだ。だからもつと羽ばたいて世界を見ておいで。下手をすると僕は化石となつて、キミに探してもらえなくなってしまうかもしれないよ。」

「そんなことないよ！！もし化石になつても、絶対に掘って掘って掘り返して速人を見つけてみせるわ！！」

「分かった。分かったよ、ありがとう。ぜひそうしておくれ。それから、さっきの前者の質問だけど・・・僕の中では、去年の冬に初めて董が部室に来た時から、何一つ変わっていないよ。大好きだし・・・大切だし・・・愛しいと思っている。だから心配しないで、向いた

い将来へ行きたい道へ真っ直ぐ進みなさい。僕が出せる力を出し切  
つてもバックアップはするからね。」  
期待通りといえば期待通りかもしれないけれど、なんとか口を開か  
せたって感じかな？  
ワタシとしては心の中の何かをすうとさせてもらったし、充分大  
切な言葉をもらったので、これから色々な壁に立ち止まる事があつ  
ても頑張れる！大丈夫！って思った。

~~~~~

そして、この学校の歴史を変える奇跡を起こして・・・暦の上では
冬に入った露隠月つゆこもりつき、夢の扉を開く鍵を手に入れた。
それは彼の存在と言葉のパワーのおかげかもしれないって今でも思
ってる。

しばらくして、新しい年を迎えてすぐに、私は日本を離れた。。
旅立つ時に初めて彼から手紙を渡された。後にも先にも彼が私にく
れた手紙はコレ一通。

しかも！珍しく彼が真っ赤になって、ぎこちない素振りで…今でも
その時の事はハッキリ覚えているし、これからも忘れない。その手
紙も宝物の一つとして大切にしまっている。

『キミと初めて会った季節がまたやって来る。だけど、それを待た
ずにキミは扉を開ける。いとも容易く…身軽に…そう、野原へ散歩
にでも行くように。いつも帰り際、胸の辺りで小さく左手をふる
…あの仕草、もうしばらくお預けってことかあ。
寂しいのはキミばかりじゃないんだよ。口に出したら自分自身がど

うなるか怖かった。キミを困らせてしまっし、壊してしまうかもしれないから。。。これで良かったんだ。

やはりちよつと意地悪な神様からの贈り物なのかもしれないね。有り難く頂いて、神様を見返してやろうじゃないか。意地悪な神様と僕達とどちらが我慢強いかな。

キミがこれを読んでいるということは、気持ちを揺るがす何かが起こったか：日本が恋しくなっただっていう事だね。いつでも連絡してくれていいよ。僕はいつでも傍にいるから。

速人 』

そうそう、この手紙を手渡す時に彼は『つらくなったり、困った事が起こったり、悩んだりしたら開けるように。』と話してくれたわあ。だけど私は、行きの飛行機の中でドキドキしながら開いてしまった。まあこれから始まる1年間の事を考えたら不安だってあるし、彼の意図する状況とは全く違うとは言いい切れない心境だったから、まあ善しとしましょう。

だって、先にも話した通りに彼から手紙をもらったのなんて初めての事だったし：他に留学する9人とは顔見知りやフツーにクラスメイトってだけで、特別仲がいい子なんていなかったから、ワイワイ話しながら・・・なんていうのはなかった。

みんなそれぞれの想いで留学する決心をし、ワクワク・ドキドキ・ハラハラ・・・色んな感情が入り乱れて同級生とおしゃべりしながら向かう余裕なんて誰一人持っていなかったと思うの。っていうか少なくとも私はそうだった。

その後帰国するまでの1年間、手紙がボロボロになるほど何度も何度も見返して、大切な大切なお守りとしていつも持ち歩いていたの。

もちろん、カルチャーショックをうけて殆ど眠れずに泣き腫らした目で朝を迎えた事もあったわあ。

また、クラスメイトやホームステイ先の家族と上手く意思疎通や会話が出来なくて自信を失くしてブルーになったりもした。本当に様々な体験や経験をしたわあ。そんな中でもやっぱり手紙と風待月の夕暮れ時にもらった言葉が確実に私の支えになっていた。。。

それから何故かお互いに連絡は一切しなかったの。彼からもメールは来なかったし、私からもメールも手紙も書かなかったし。だけど不思議と怖くもなかったし不安にもならなかった。

留学中の滞在に関しての不安や悩みはあっても、彼に対して1年間離ればなれで寂しいとか彼女が出来ちゃうんじゃないかな？とかは皆無と言っていいほど思わなかった気がする。

何故そんなに心配にならなかったか？って言ったらそれは全て恵のおかげ。

恵は高校3年のクラスが彼と同じ私立文系クラスだったのと、二人の奇跡の証【生徒運営議会】で顔を合わせていたってこと。

そして、メールや手紙のやり取りを彼女とは1年間していたから。普段はメールで・・・私の誕生日には行事の時の写真を同封してくれた手紙も送ってくれた。

今はどんな行事で動いているとか・・・クラスでの雰囲気はどうとか・・・また以前の無口でポーカーフェイスの【氷の速人】に戻ったってささやかれているって事とか、リアルタイムで情報をくれた。高校へ入学した当時に遠くから彼を見つめている時期を思い出すように、懐かしさと新鮮さが可笑しなほど交じり合っていた。

私もコチラで出来るだけ吸収して帰国しようって必至になっていたし、恵も受験勉強で毎日ギチギチに過ごしていたみたいだから、きっと彼も同じように受験勉強に追われていたに違いない。私も恵もメールでやり取りすることでストレス解消?!発散?!でき、いい

気分転換になっていたのかもしれないって今は感じる。

ただ、私が帰国してから大学が始まるまでの春休み期間中は、ほとんど一緒に過ごしてた。

それも卒業旅行に行く！とかじゃなくて・・・久しぶりにたくさん映画を観たり、遊園地に行ったり、キレイな梅を見に行ったり、カラオケに行ったり、1年間離ればなれだった時間を埋めるかのように、フツーに一緒にいられる喜びを感じていたのかもしれない。

まあたぶんそれは、意地悪な神様が負けた代わりに、1年間頑張った二人にご褒美をくれた時間なのかもしれないねえって話していたの。

第20話：董の章へ露隠月（後書き）

今回は董ちゃんの気持ちを思いっきりたくさん書きたくて・・・“んどん書きたい言葉が出てきて大変でした。

だけど、気持ちがいっぱい溢れすぎて・・・？と考えると、厳選して削除していった20話目のお話として出せる力タチになったと思います。

第21話：董の章へ卯花月

『 ひらひら ひらひら ふわふわ ふわふわ

それは 蝶のように

それは 雪のように

私たちの上を 自由に 優雅に 綺麗に舞う

あなたの上にも 自由に 繊細に 爽やかに舞い降りている

いつか二人で見上げた

あの空も あの雲も あの花びらも

いつかまた手を繋いで・・・歩きたい あなたと 』

また、この季節がめぐってきた。桜の花が舞い。。。辺りを淡いピンク色の絨毯を敷きつめた様に一気に模様替え。

以前もお話した通り、私の小学校卒業と姉の中学卒業を待って、田舎から都会に引っ越してきました。
今までは父の転勤にあわせて転々としてきたけれど、母の願いもあってその時の引越しは移り住むって感じだった。

私の中では別に気にも留めていなかったけど、やはり中学生ともなると思春期。特に女子の仲間意識は強かった。

地元小学校からの繋がりが出来ていて、初めて「馴染めない」と感じた。

そして、新しい環境に対して恐怖感というか消極的になってしまったのもこの頃から。

そんな私をみていてか？母の母校でもあり、系列大学へ6／7割進学しているっていうこの学校を母が強く勧めてくれた。

そして15の春に、この坂道を一所懸命に上って・・・上って・・・この高校へ入学。

さらに18の春にはこの坂の途中にある系列の大学へ。

敷地は広く、緑に囲まれていて過ごしやすい。

周りも見知った顔も多いので、いつもなら下を向いて歩いていた私も、ここでも安心して過ごせそうって思った。

ただ、恵はライターとしての夢を叶える為に別の私大に進んだので、高校入学から色々相談にのってもらったりして、私にとって初めて親友と呼べる友人だっただけに本音を言えば少し寂しい。

ほどなくして私の大学生活はスタートし、一緒に留学した仲間たちとは今でも仲良くしています。

初めのうちはライバル心や自分の事で精一杯で周りを見る余裕なんてなかった。けど同じ環境下にいる仲間意識とでもいうのでしょうか？色々助け合いながら教えあいながら過ごしてきた。。同志って感じです。

彼とは学校生活がなじむまではお互い忙しく時間も合わないので、

メールでのやり取り。

内容は大したことではないのだけれど、日記をつけるように彼へのメールを送っていました。もちろん彼の方も一日の出来事を日記のように綴って送ってくれました。

初日は。。。彼からメールが届いたので、嬉しくなって直ぐに返信を送ってしまいました。

『董、僕は大丈夫だよ。

この様子だと、これからの大学生活もなんとか楽しく過ごせそうだ。

キミの方はどうだい？

系列の大学に進んだから、友達もたくさんいるだろう？

そんなに日にちが経っていないのに、懐かしく感じるよ…

また、たくさん話をしよう キミの笑顔のもとで』

『。。。この様子とは？どんな風なの？

・・・もしかしてカワイイ子でも見つけた？

私の方は友達はたくさんではないけれど、見知った顔ぶれがチラホラいるので大丈夫です。

だって、留学している時は周り中が知らない人・言葉が上手く伝わらない人ばかりだったから、それに比べれば全然大したことじゃない

いわあ。

私も速人に話したいことが、たくさんたくさんあります。その日まで。。。』

その後も徐々に楽しくなっていき、充実した大学生活を送ることが出来た。もちろん勉強も頑張ってた〇（ハ・ハ）〇ちゃんと。

今になっても確信できるのは・・・私の中での転機はやはり彼との出会い。

今までの私だったらきつとこんな風には言っていないだろうなあ。っと思う時がしばしばある。

第一彼と出会っていなかったら、彼の構想を聞いていなかったら、絶対に生徒会長になんて立候補してなかった。

それまでの私と出会ってからの私では１８０度違うといってもおかしくないと言い切れる。

静かな炎をいつも心の奥に灯しているようで、計画的に物事を進めていき…常に自分だけのビジョンを持っている。

たとえ周りがどうであれ…自分自身の持論を追求して、初めのビジョンを確実なものへと変えてゆく。

となりで見ていたり、一緒に活動することで、その先を一緒に見てもいた気になった。

自分にも何かが出来るのではないかな？なんて思ってしまうくらいで…だから生徒会長にも立候補したし、留学することも決断出来た。前向きに、積極的な私に変わったのは、すべて彼のおかげだと思っている。

帰国して、自分自身少し成長したかな？これで少しは彼に近づけたかな？なんて思ってたくらい。

そして、春も終わりに近づき、そろそろ衣替えを意識しだした頃のある朝、目が覚めた私はなんかソワソワとしていた。

「何なんだろう・・・この感じ。なんでなんだろう。」

こういう感じを胸騒ぎとでもいうのかなあ。

心当たりは全くないし…母に隠し事でもあったかな？それもないし。。

ない頭をひねっても出てくるのはレポートの事。

そっかあ。。あつたわ、レポートが完成していないからだわあ、きつと。

今週末に提出なのに、一応出来てるんだけど、どうもまとまらないっていうかしっくりこない部分があって完璧さに欠けてる。

今日は少し早く行って学校で頑張るかあ。

とりあえずメールチェックして…

ご飯もしっかり食べた。

あとは身支度したら出発だわあ。

気分がイマイチな日は周りからテンション上げなきゃ！

先週末、恵と久しぶりに逢ってショッピングした時に買ったワンピース。

ここ最近で一番のお気に入りだったりする。

街は衣更えで半袖率が高くなってきたけど…至る所でエアコンが効いているから、この七分袖でちょうどいい。

色もアップルグリーンに白い模様がランダムにあって。

今日はヘアも珍しく一回で決まったしイイ感じ

とりあえず外側からテンション上げた分、気分良く駅までの道を急いだ。

つとそこまでは普通の朝だった。

駅に向かう人たちの中には、もう半袖の人がいるくらい蒸し暑い。でも、お気に入りのワンピースを着て軽やかに歩いてゆくと、真っ直ぐ眼に入ってきたのは・・・

ビシッとスーツ姿の速人。表情も緊張しているのか？視線が痛いほどに刺さってくる。

それでも私は真っ直ぐ歩き続けた、彼を見つめながら。

その間も私の方をじっと眼を凝らしながら真っ直ぐ立っている。ロータリーの端にある外灯に少しもたれながら、顔と視線だけはしっかりと私の姿をとらえて離さない。っといわんばかりに。

しばらくすると・・・こちらに向かつて歩いてくるし！！

なんかいつもと違ってカッコ良すぎる。だけどこれはナイショ。だって、そう見せたくての演出なんだって事くらい分かるから。

「おはよう。。そして、おめでとう。」

目の前で立ち止まると、周りの視線なんか無視してサラッと云って優しく微笑む、彼。

私は彼が立ち止まるよりも少し前に足が止まってしまった。っとうか動けなくなってしまうたと言った方がいいかもしれない。

「あつ。おっおはよう。。え？おめでとう？」

全然頭は回らずにただ口先だけで挨拶した感じになっちゃっているはず。

だって、足が動かなくなっただけじゃなくて、全身動かなくなってしまったから。

しかも朝から「おめでとう」って何なんだろう。何かあったっけ？

私。

「アレ？俺、間違えたかな？・・・今日、董の誕生日だったろ？19歳、おめでとう。」

今度は彼が慌てて何かを差し出した。それは小さな小さな綺麗なペーパーバッグだった。

私自身、今度提出するレポートの事で頭が一杯の毎日だったから、今日が自分の誕生日だったことすら忘れていた。

「あつ！そうだった。あつありがとう。」

ワザとじゃなく、本当に忘れていたんだけど・・・とりあえずお礼を言わなきゃ！って感じて返事をした。

「良かったあ。間違えてなくって。今日最初におめでとうを言いたくてさ。メールとかじゃなく、ちゃんと目の前にして俺の言葉で言いたかったから。」

それはそれは間抜けな私・・・ロマンチックのかけらもない感じの自分の返事に恥ずかしくなった。

彼からのプレゼントをそつと覗き込んだらジュエリーボックスが入っていた。

まさか！まさか！の連続でまだ夢の中なんじゃないのか？と疑ったくらい。

急な展開に頭の中がぐるぐるしてたら、彼が話しかけてくれたのに呆然としちゃった。

「学校だろ？とにかく歩いて電車に乗らなきゃな。」

そう言ってくれたのに、私の手をとってくれるまで気が付かないくらいだった。

「うん。だけど、ゆっくりで大丈夫だよ。今度提出のレポートを早

めに行って書いていようと思っていただけだから。って言っても速人も学校だよね。」

何言ってるんだろ。別にレポートの事なんて言わなくてもいいのに…

しかもなんでこんなにドキドキしているんだろ。手を繋ぐのなんて初めてじゃないのに。

ホント…まるであの雪の日みたいにドキドキが止まらない。

「今日は特別だ。代返頼んでおいたから大丈夫。ゆっくり出来そうなら、お茶でも飲んでいくか？」

強引さはなく、優しくエスコートする様に私を駅へと連れて行ってくれる。小さな街の小さな駅が、さながら素敵な洋館に見えてしまうような…。

それから2つ先の大きな乗換え駅で降りて、新しく出来たオープンカフェのある可愛い喫茶店に入った。

明るい窓際の席で、彼はエスプレッソ。私はカプチーノを頼んだ。久しぶりにゆっくりたっぷり話をした。

新しい学校生活、新しい友達、少し前に恵と逢ってショッピングした事…たいした話じゃないけど、一つ一つ頷きながら聞いてくれて自分でも分からないけど止まらないくらい話してた。

一気に話してノドはカラカラ。一息つくと私の身体中がまたドキドキし始めた。

そんな私を気付いてか…彼は半分ほど残ったエスプレッソを一気に飲み干すと緊張しながら…でもしっかりと優しく丁寧に話をはじめた。

プレゼントはシルバーのリングだという事。

どうしてこれを選んだかという、速人のお母さんが「女の子は1

9歳の誕生日にシルバーのジュエリーをもらうと幸せになれるんだって」

って話していたのを聞いて、タベ3つくらいお店を回って決めた事。もちろん一人で行ったから恥ずかしかったとか：彼のイメージを崩すような可愛い話も聞いた。

しかも、先日恵からのメールで一緒に食事をしたりショッピングに出かけたのは、速人からの依頼を受けての事だったことまで発覚！正直驚いた。。。けど、改めて考えると”緻密な計画””段取り””行動派”の彼なら領けるかも。

「どうして今日はスーツなの？」

本音も聞いたことだし、彼の可愛い一面という意外な所も分かったし、楽しい空気になってやっとドキドキも落ち着いてきた頃に、勢いあまって聞いてみた。

もちろんカツコ良すぎて見惚れてしまった事はまだナイショだけど。

「自分自身に気合を入れるためにキチツとした服装が良かったから。」

なるほどねえ。なんとなく分からないでもない。

今まで何度となく彼の色々な場面に立ち会わせてもらったけど、制服のボタンをキチンと閉めて戦場に向かうべく眼差しでステージなりに向かっていったからだ。

そろそろ恋に恋する年頃は卒業かな？なんて思っていたけれど、まだまだ彼に恋してドキドキしていたいなあ。。。なんてリングを右手にはめながら考えていた。

第21話：董の章へ卯花月（後書き）

これで董の章は終わりになります。

すみれちゃん視線のお話は、楽しんでいただけたでしょうか？

まだまだ稚拙な文章で読みにくいかとは思いますが、あともう少しお付き合い願えたら嬉しく思います。

そして、いよいよ速人の夢が実現する日を迎えるまであと少し。。。なので。

第22話：君と僕のシナリオ（前書き）

長い間そのままスミマセン。書ける状態でなかったの。
今回からは速人サイドから終盤戦へ向かいます。

第22話：君と僕のシナリオ

☐
湿気を含んだ風が 肩を撫でるように 通り抜けてゆく

この瞳も この髪も この唇も すべてを愛おしく想い

僕の中は 君でいっぱいに満ちている

たとえ全てを失くしても

君だけは 失いたくない

君のとなりに いつまでもいたい

君のことを 守り続けたい

情けないと思うが 初めてそう思った

自分が信じられないくらい 人間くさいヤツだと自覚した

ここ数日感じるのは 君の幸せのためなら 僕は何でも出来る

そう 君のためなら 何だって
☐

僕らが逢わなくなつて、どれくらい経つたのだろう……

ん！？ 逢わなくなつてか？ 逢えなくなつてか？

時々メールのやり取りはするものの、なんか時間が合わなくて顔を合せていない。

電話でもすればいいのだが、こうも空白の時間が長いと声をかけても何を話せばいいのか戸惑つてしまう。

何も考えなくていいはずなんだけど。。。全く情けないつと自分でも嫌なくらい分かつている。

この空白の日々の間、忘れていたわけじゃない。いや、一日だって忘れたことなんてない。

全ては言い訳になつてしまつので口には出さないが、想わなかつた時なんてない。そう言いきれぬ。

ただ一つ不器用なのだ。何に対しても。いくつものことを並行してできない不器用者なのだ。

小さい時から、初めての環境や初対面の人にはどうも馴染みにくい性格で、慣れるまでに時間がかかる。

後々友達に言われて分かつた事だが、どうやら相手にもとつつきにくいヤツだと思われているらしい。。。

そんな所も父親譲りだと母につつかれる。

君を初めて見た時もそうだった、一瞬だけ。

そう、一瞬だけだった。不思議とイヤな気持ちは感じなかった。

緊張感はあるものの、むしろしばらく一緒に居たいとさえ思った。

この僕がそんな風に感じたのは恥ずかしいが初めてだ。

後にも先にもあの時だけだと思う。って先のことは分からないけど……恐らく、いや断定できる。

それから恥ずかしついでにもう一つ。

君が留学した時も遠く離れる事が怖かった。もう二度と逢えなくなるんじゃないかと不安に陥るほどだった。

怖さを紛らわすかのように、あの手紙を書いていた。自分に言い聞かせるように…

週末の寝る前に、決まって翌週分のスケジュールを確認する。

それは連休も過ぎた頃、大学にも慣れてきて、かつての悪友とも今までの時間を埋めるかのように騒ぎあたりしているのにも飽きてきた頃だった。

いつものように予定を確認するために、まるでビジネスマンが使っているような黒いカバーの手帳をカバンから取り出した。

それは半年近く使って、手にもしつくり馴染んでカバーも柔らかく手のひらの形にカーブを形作っていた。

パラパラとページをめくると赤のボールペンで僕にしては丁寧に書かれた文字が並んでいた。

『堇の19歳の誕生日』

身体中を電気が走ったようにっとは正しくあんなことを指すのだと思う。頭から背中、脚、足先、肩、肘、指先へとピリピリと信号が走った。

この日、この時しかない。

まだ10日あるから計画だって段取りだって準備だって出来る。僕から逢いにゆこう。

そう思ったら来週の講義のスケジュールとバイトのスケジュールを照らし合わせた。

そして、以前母が昔の写真やガラクタ箱を片付けながら言っていた

事を思い出した。

堇が知っているか知らないかは別として、これは絶対に思い出したって事に意味があるのかもしれない！っと勝手な解釈をして計画を立て始めた。

大体の流れとイメージは出来たものの肝心なところで行き詰まってしまった。

流行りのデザインなんかはネットを駆使すればいいのだが、サイズが分からない・・・。

大きすぎてもダメだし、小さすぎても使えない。ジャストフィットしなければ意味がない。

考えて…考えた挙句の果てにメールを試してみた。

相手は覚えているのだろうか？アドレスは変わっていないか？そんな事頭に浮かぶわけもなく、ただひたすら単純明快に簡潔にまとめてメールを送った。

意外なほど早く返事は返って来た。相手は恵だ。

恵はめっちゃウケた様子で、今すぐ答えられないけど、分かり次第メールをくれるつということだった。

それからというものの何も手につかず、落ち着かず、自分でも情けないのを通り越して笑ってしまうほどだった。

しかも最近話かけもしなかった母さんとも話すようになったり…

おかしな一週間を過ごしていたように思う。

疲れていたのか…本当に気でもふれたか？

前々日までは講義もビッチリとって、バイトもしっかり入って、余計な事は考えないようにしていたっていうのもあるかもしれない。

まあ、恵からのメールがなかなか来なかったもので、焦っていたのも手伝わっていたかもしれない。

そして前日は、イベントのリハーサルのように…予定していた電車に乗り、彼女を待つベストポジションを近くの喫茶店から眺めながらチェックしていた。

洋服もOK。靴も磨いてOK。

当日の代返も達也たちに頼んでおいたし…あとは肝心のものだけ！恵からは、僕の中でのタイムリミット、ギリギリの誕生日2日前にメールが届いた。

サイズも分かったし楽勝！と思っていたのが間違いだった。

女性にこんなプレゼントをするのも初めてだし、こんなきらびやかな店に入る事すらなかった。

ここにきて計算違いをしているとは…

宝飾品の値段の高さ！たくさんのお宝飾品もどれも同じように見えてくるし…ケタ違いの値札に目が回りそうだった。

初めの店でカルチャーショックを受けて…

次の店で少し学習して…

更に次の店ではやっとデザインを選ぶ余裕が出てきた。

帰りの電車の中では、小さな紙袋が潰れないようにコーナーを確保して、そっつと抱えながら帰った。

家に帰ってからは直ぐに風呂に入って寝た。

つというより布団に入っても頭はギンギンに冴えて寝られなかったが、目をつむるだけでも眼精疲労は解消される。クマが出来た顔で会うわけにいかないからな。

もちろん寝坊なんてもっての外だ。

………そんな時に限って意地悪く達也や恵からメールがきたりする。奴らは完全に悪友という枠付けに入るな。つとケータイを睨みつけながらサイレントマナーにした。

そして、気を取り直して布団を頭から被り、翌日に備えた。

翌日、自然と目覚ましが鳴る前に目が覚めてしまった。

この目覚ましを買ってもらったのが中学入学前くらいだから・・・この7年間近くはいつも目覚ましで鳴って、一度消して・・・また鳴ってそれでやっと起きだすのがいつもの僕。

まあ、さすがに今日寝坊したら話にならないからなあ。

今日はいつものカジュアルではなく、スーツで出掛けようとしているものだから

やはり何か違うと察した母さんが出掛ける際に

「落ち着いていきなさいよ。あとは帰る時にはメールしてね。」

つと一言リビングから顔だけ出して言った。

いつもなら今日の予定はどうなんだとか、帰りは遅いのか、夕飯はいるのか、なんて何かと会話を求めてくるのに。。。

そこが母親というものののだろうか？男の僕には見当もつかない。

もう衣替えかぁ・・・制服でなくなってからそれ程長い訳でもないが、季節的な感覚が鈍ってきているみたいだ。

計画していた時間よりも1時間弱早く着いてしまった。まあ、遅いよりはいい。

こんなにも時計の針が遅く感じた時は無いかもしれない。

常に時間が足りない！と感じ、逆に時計の針が早く動いているのは僕だけなんじゃないか？と錯覚を疑うことは何百回だってあるのにな。さすがに今日は違う。

信号が何度切り替わったことだろう・・・

朝日が夏の日差しに変化しかけた頃だろうか？

遠く遠く真っ直ぐ見た先にキミを見つけた。

恐らく普通の人ならわからないくらい小さく見えている段階だ。でも僕ははつきりと認識できた。

上機嫌の時には跳ねる様に歩くリズム。

どこから見てもご機嫌なのが分かるような董の歩き方が、こんな人ごみの中では目印になる。

おおかた買ったばかりの気に入った洋服を着てきたからだとか言うんだろうなあ。

今日の日のために気合入れてきた僕の事なんか微塵も分かるまい。それでも僕は真っ直ぐ見つめ続けてキミを待つ。

しばらくすると、いつものリズムがちなくなつて、ゆっくりになつてきた。

ようやく僕に気がついたか？

僕の描いていた董のリアクションも全く同じだし・・・では、そろそろ僕のシナリオを進めさせてもらおうかな。

「おはよう。。そして、おめでとう。」

真っ直ぐに歩いてゆき、目の前で立ち止まった。

駅へ急ぐ人並みを空気かの如く気にも止めないで真っ直ぐとキミへと歩く。

もちろん周りの視線バシバシなのは分かっている。だけど、そんなのはどうでもいい。

僕にとっては今日の今が大切なんだから。

そして、きっとキミの瞳に映っているのも僕だけはずなのだから、それ以外は関係ない。

「あつ。おつおはよう。。。え？おめでとう？」

慌ててる！慌ててる！そうだよなあ、メールも電話もしないで急に現われたし無理もない。

しかし、なんでだ？自分の誕生日くらいは覚えているんじゃないの

か？

それとも僕が間違えたのか？

ちよつと待てよ。。。。違かったら今日の計画はなんだったんだ？！
声をかけるまでは全く回りの音なんか聞こえていない状態だったのに、一気に鼓膜にぶち当たるかのように大音量で僕の体を通り抜けるように入ってきた。

「アレ？俺、間違えたかな？・・・今日、董の誕生日だったろ？19歳、おめでとう。」

いきなりの急展開に動揺しまくりだ！

普段、達也や直樹らという時みたい「俺」とか言ってるし。有り得ないだろう！こんなに動揺するなんて、この僕が！！

いや、たとえ違ったとしてもそうは日にちは違わないはずだ。

この10日間を無駄にしないためにも、コイツとともに気持ちも渡さないで明日がない！

そんな必死の想いで小さなバッグを差し出した。もちろんそんな気持ちには出さずに。

「あつ！そうだった。。あつありがとう。」

本当なのか？本当に忘れていたのか？今日でいいんだよね。そんな程度なのか誕生日って？！

男だったらありえそうだけど、ましてや・・・いや董の事だ、また何か大事な事を抱え込んでそれどころじゃなかったんだろう。今はそう思いたい。

「良かったあ。間違えてなくて。今日最初におめでとうを言いたくてさ。メールとかじゃなく、ちゃんと目の前にして俺の言葉で言いたかったから。」

これはホントに僕の気持ちだ。

たださすがに董の波に久しぶり乗り切れなかった自分がやるせない

がな。

数ヶ月というのはそんなものなのだろうか。こんなにも変えてしま
うのか。

ここしばらくの自分の生活を反省しつつ、平常心と自分のペースを
取り戻そうと何とか努力した。

そうして、周りの雑踏も気にならなくなり、徐々に落ち着いてはき
たが・・・

「学校だろ？とにかく歩いて電車に乗らなきゃな。」

僕はとつさに董の手をとり、駅への道をゆつくりだが急いだ。

この場にいるのもなんだし、とにかく行動に移さなきゃどうにもな
らないからな。

ただコレだけ渡しにきたわけじゃない。まだ目的の半分も達成でき
てない。

「うん。だけど、ゆつくりで大丈夫だよ。今度提出のレポートを早
めに行って書いていようと思っただけだから。って言っても
速人も学校だよな。」

なるほどなあ・・・さてはレポートが上手く進まないから自分の誕
生日も忘れていたというわけか。

っていうか僕はレポートにも負けたってことなのか？

まあいい、レポートでも何でもあとで僕が見てやろう。

「今日は特別だ。代返頼んでおいたから大丈夫。ゆつくり出来そう
なら、お茶でも飲んでいくか？」

もちろん今日一日は董のために使うために一切用事は入っていない。
悪友達にも釘を刺すメールは朝出かける前にしっかり入れておいた
から、邪魔はしないはずだ。

本当ならば久しぶりなのだから、メシくらい一緒にしたいところだ
がな。

そのまま電車に乗り2つ先の大きな乗換え駅で降りて、董の選んだ新しく出来たというオープンカフェのあるこじんまりとした喫茶店に入った。

店はいかにも女性の好きそうなテイストでまとめられていて、董とじゃなかったら僕は入れそうにないかもしれない。

店員に案内された先は明るい窓際の席で、僕はエスプレッソ。董はカプチーノを注文した。

その後は久しぶりにゆっくりたづぷり彼女の話をした。

新しい学校生活、新しい友達、少し前に恵と逢ってショッピングした事…近況報告といったところだが楽しそうに話す董を久しぶりに見て、とても安らいだ気持ちになった。

勢いでしゃべり続けて疲れたのだろう。ふとしばらくの間が出来た。僕は半分ほど残ったエスプレッソを一気に飲み干すとゆっくりと話し出した。

第23話：僕の誓い

『今でもハッキリと覚えている
初めて君に会った日の事を…』

いや 僕にとつて君に初めて会った日だね
君には 初めてなんかじゃない

君が勇気を出してくれた日 っと言った方がいいだろう

まさか 君が僕をみていたなんて
なんだか半年間も 僕は損をしてしまったように思うが…

いや これからの長い人生において
半年間なんて大した誤差にはならない
だから 気にしないでおう

今のこの気持ちを伝える事が大事であつて
君の気持ちを知りたい方が先だから

そしてまた 一緒に歩いていきたい
将来を夢みる事がこんなにもワクワクすることだなんて思わなかった
君と出逢うまでは知らなかったよ

君の傍でみる夢は色鮮やかで絶対叶うと信じられた ありがとう『

キミは勢いでしゃべり続けて疲れたのだろう。ふとしばらくの間が出来た。

僕は半分ほど残ったエスプレッソを一気に飲み干すとゆっくりと話し出した。

「それ・・・開けてみてくれないか？どうしても今日、董に渡したかったんだ。」

董はハッとした顔をしてゆっくり頷き、そーっとピンクのリボンを解いて、ツヤツヤしたサーモンピンクの包装紙を丁寧に開いていった。

話したいことは山ほどある。だけど言葉を選びながらゆっくりとしゃかりと一つ一つの言葉が董に届くように話した。

「母さんが家の片づけをしている時に、昔父さんからもらったの僕に見せながら話してくれたんだ。

『女の子は19歳の誕生日にシルバーのジュエリーをもらうと幸せになれるんだって』ってね。

それは、母さんが19歳の時に父さんからもらったもので、星型が付いた小さな指輪だったんだ。」

僕がそう言い終える頃、君はベルベット調の丸みをおびた厳かなケースを取り出して、ゆっくりと開いたところだった。

「夕べは、3つくらいお店を回ったんだけど...もちろん一人でいった。

やたら恥ずかしかった。

店員に色々聞かれても訳が分からないし、1件目では逃げるように出て来てしまった。

2件目では、少しデザインやなんかを見る余裕も出てはきたが、なんだか落ち着かず出て来てしまった。

3件目で店の中を少し歩くと直ぐにこれが目についた。絶対に董に似合う！って思ったんだ。」

少し緊張と興奮気味になつて、だんだん声がでかくなつてしまったかもしれないと反省して、一口水を飲み、気持ちを落ち着かせトーンも抑えて続けた。

「それから、恵にメールしてサイズを聞きだそうしたらアッサリと分らないから自分で聞けば？」

なんて失礼な返事がきたから、『分からなかつたら聞いてでもして至急連絡入れるように！』と頼んだんだ。

だからいきなり恵から連絡があつただろ？すまなかつた。」

とりあえず全てを暴露してしまおう。隠していても仕方がないからな。

話しをしている間に堇は、しっかりというか…ちゃっかりというか、右手の薬指に指輪をはめてニコニコしている。

「ピツタリだよ」ありがとう。

可愛いハートがついてて一目で気に入っちゃったo(∩_∩)oでも、どうして今日はスーツなの？」

堇はそんな風に喜びながら、手をヒラヒラとさせたり、陽射しに透かすように斜め上にかざしてみせたりしていた。

「自分自身に気合を入れるためにキチツとした服装が良かったからかな・・・」

まさか、そんなところを聞かれると思わないから、意表をつかれて返事に戸惑ってしまった。

まあ、これは本当だ。

自分自身の儀式じゃないがな、気がついたらそうしていた。

「なんとなく以前から制服のネクタイを締めるとスイッチが入るといふか…」

きちつとした服装になると、余分なものをそぎ落とした様な感があるからな。

集中できるっているか・・・やるぞ！とか、いくぞ！とか気合が入

る感じがするんだ。」

僕がそんな風に自分に確かめながら説明していると
いつの間にか注文していたのか？でっかいパフェを持ったウェイト
レスが近づいてきて

「お待たせいたしました。ハッピーパフェをお持ちいたしました。」
つとにこやかに営業スマイルを振りまいて、董の目の前にそのパフ
エを置いて

手際よくテーブルを整理し、会釈に「ごゆっくりお召し上がりくだ
さいませえ。」と添えて去っていった。

呆気にとられながら僕は言った。

「おい。。。。それ、いつ頼んだんだ？しかも、それ一人で全部食べ
られるのか？」

いつもにまして視線を感じる。
絶対近くの席に座る客の視線と興味は、このパフェに釘付けなこと
だろう。

「え？さっき指輪をみる前かな？

それに！今日は誕生日なんだもん 速人にもちよつと分けてあげる
からさっ！心配しないで。」

銀色に光る細長いスプーンを右手に持ち、ニコニコとどこから食べ
ようか眺めている様子は

まるで大事な宝物のおもちやを手にした子供のようだった。

「っあ？ああ。その頃は指輪の話をしようと思って、半分真っ白に
なりかけていたから気が付かなかったんだろう。

っていうか、僕は欲しいなんて言っただけ！？ただ、完食出来る
のか心配したんだ。」

っと言うのも聞いているのか？聞いていないのか？

トッピングされたフルーツから攻略し始めて、何やら突き刺さっているプレッツェル状のお菓子をつまんでいる。

しかし、ホントに幸せそうな顔をしながら食べているよ、キミは。堇の気持ちは全然分らないままだし・・・口には出せないが、僕は複雑な心境だよ。

早くも全体の半分ほどまで差し掛かった頃

パフェの容器の中を見つめながら、ふと何かを思い出したように「・・・そう。速人。」

視線はそのまま、ムダにスプーンで中身を突きながら続けた。

「今日はありがとね。すごく嬉しかった。それに安心したわ。しばらくケータイ越しのやり取りだったから、不安になってたの・・・私。」

だから、ワザと連絡もあまり入れないようにしたりしたし、課題に集中したり、新しい仲間との生活で時間を潰したりして気を紛らわせたのかもしれない。

そんなだから自分の誕生日にも気づかなくて・・・」

笑顔で話し始めたのに・・・だんだん表情が硬くなって、涙がひとすじ零れた。

その先は言葉を詰まらせて、歯を食いしばるようにして必死にこらえていた。

「ごめん。僕がもつと気遣ってやらなければならなかったのに。

昔の仲間と再会して、流されすぎたのかもしれない。

でも、これからは大丈夫。堇を二度と不安になんてさせないから、僕を信じて欲しい。」

俯きながら、手を震わせて涙をこらえているキミ。

とっさに僕は震える手を両手で包み込んで、不安になるもの全てを取り除いてやりたかった。

「その指輪に誓って、僕自身をかけて、キミの全てを守るよ。・・・分かるね。」

キミは目を閉じたまま、一生懸命コクンコクンとしつかりと頷いた。そのままのくらい過ぎたのだろ。1、2分？いや5分？

短いとも長いとも言えないくらいだがそのままの姿勢でいた。

いつしかキミの手の震えも止まり、かたまっていた肩の強ばりも解けて

「・・・ありがと。速人。」

ポツリとつぶやくように沈黙を破ったかと思うと、小さく笑い始めた。

「フフフツ。はあやあとお。アイスクリームが溶けちゃうよ。」

「あつ。ああ、わりい。大事な誕生日のパフェだったなあ。／／／／」

握り締めていた両手をそっとはなした。

キミのぬくもりを手のひらに感じながら、ぬくもりが少しでも消えぬよう指を組みテーブルにそえた。

「はい。あゝんして。スポンジとアイスと生クリームが絶妙よ（＾０＾）／」

笑った時に、しっとりしたまつ毛が少し光ったように見えた。

とても綺麗で可愛くて、とても愛おしかった。

そして、僕は少し・・・いや、かなり恥ずかしかったが、差し出されたそれを大きな口を開けてパクリと食べてみた。甘すぎずホントに美味しかった。

「よぉゝし、今日はこれから速人とデートだわあ 決めたからね！」
続きの後半戦をパクパク食べながら、嬉しそうに君は言った。

「おいおい。大丈夫なのか？大学の方は？

確か・・・レポートがどうのって言ってなかったか？本当に大丈夫なのかよあ。」

元々予定は入れずにおいて、董のために今日一日を使うように決めていたから

僕の方は大丈夫なんだが、さすがに驚いた。

すかさずキミはケータイを取り出して誰かにメールを送っている様子だ。

「だいじょーぶ！今、友達にはメールで連絡入れておいたから！

それに、レポートは今週末の提出だし、今日は速人っていうセンセゝがいるから添削してもらうもん

ほらっ！決まったからには、速人も連絡しておかなきゃ！」

そっそっということだったかあ。

まあレポートは話を聞いた時から僕がみてやらなきゃなあっとは思っていたけど

そっとう気持ちのスッキリしたんだなあ。

活き活きとしている様子がわかるよ。

「ぼっ僕の方は大丈夫だ。元々今日一日は董のために使おうと思っ
て丸々空けておいたから。」

しかも、目の前にそびえていたような、董の顔よりもでっかいパフ
エは

どんどん攻略されまくり、もう残すところあと数口で完食しそうな
状態で

その勢いにも圧倒されて、今日のキミには驚かされた。

第23話：僕の誓い（後書き）

ハッピーパフェ。気になりますが、私が学生の頃駅前の喫茶店に名前は忘れましたがポ キーが2本TOPに刺さった大きなパフェがありました。

今もあるのかは不明ですが。

友達と一緒に特別な日には食べに行く約束みたいなのがあって・・・
っていつかいつの間にかそんな風に決まっっていて。懐かしくふと思
い出したので登場させてみました。

最終話：夢が叶った時・・・（前書き）

春には完結するといっていたのに早いですが・・・今回で最終話となります。

クールな速人が人間らしさを出して、夢に向かい将来を掴む時です。

最終話：夢が叶った時・・・

『ここから見る風景はあの頃と変わらない』

変ったのは僕だけだろうか・・・

いや 変ったように装っているだけの 僕

本当は何も変わっていないんだ 弱さを隠してクールな僕を演じてる

人見知り と とつつきにくさが

愛想笑い と 多少おしゃべりになった そうそれだけだ

君に出会ってから 弱さも出していいんだということや

人間くささも時には必要なんだということも分かった

そして 時には勇気を出して 言葉に表さないと伝わらないとい
うことも』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

歩き出した董の足取りは軽かった。鼻歌交じりで歩いてゆく。

「フン フン・・・フン フン」

もちろん僕も足取りは軽かったが、比較にならないほどだった。

いかにも女性好みの！って感じの喫茶店を出ると

もう日差しはやや肌を刺すようになっていた、さすが初夏の太陽だなあなんて空に感心しながら僕は歩いていた。

昼にはまだ時間があるし・・・デートといってもまずは映画かな？
と思っっていたら

「気になることは先に片付けておきたいから！

早速で悪いけど、速人！お願い！私のレポート添削してくれない？」

っという董の要望にこたえて、彼女の住む街の大きな図書館へ向かった。

そこからはたいして遠くないので、散歩がてら歩いてゆこう！ってことになった。

図書館へ着くと、何故か董は迷うことなく児童書コーナーの方へと向かって入って行った。

一瞬自分が間違えているのか？と思ったが、慌てて彼女の後をついていった。

結局向かっていたのは、大きな窓からたっぷり日差しが入って、いかにも気持ちの良さそうな席だ。

高さは低いが大きな丸いテーブルに、これまた低すぎるほどの小さい木製の椅子が6つ並んでいた。

窓際の席に躊躇なく座り、彼女はうんと伸びをした。

そして、大きなカバンからファイルを取り出して、分厚いレポートの束を取り出した。

伸びをしている彼女の隣にある小さい椅子に腰掛けた。

早速カバンから眼鏡を取り出して、その分厚いレポートに目を通し始めた。

その間中ずっと董は、椅子ごと右側に座る僕の方へ向いて

じーつと僕の事を眺めていた。

穴が開くほど見えているっていうのはこのことだろうと思うほど見つめていた。

初めのうちは気になって仕方がなかったが、次第に慣れてきて気にならなくなっていた。

一通り目を通した後に、もう一度流し見しながら、持っていた付箋紙にチェック箇所を記入しながら貼っていった。

それを一つ一つ横から見では「うーん」とか「へー！」とか感想とどうか感動していた。

一つずつ書き直したり、書き加えたりして修正を終えると

「やっぱり速人に見てもらって良かったわあ。

全然気付かなかったところもあるし、表現の仕方が違うだけで全然文章がカッコよくなったりするし、アドバイス道りに直してみると無敵になれた気がするよあ。」

などと訳のわからない発言が飛び出した。

「まあ彼女に喜んでもらえたんだから、よしとするかあ」と心の中でつぶやいた。

いや、しかしこんな風に甘やかしていいのだろうか？と親心のよくな不思議な感情も抱いていた

でも放っておけないのも事実だし、結局これからも同じようにみてしまふのだろうなあ。と自問自答してみたり。

恐らく僕の頭の中でこんな葛藤をしているなんて微塵も感じていないんだよなあキミは。

「じゃあ一休みしたらどこ行く？！

・・・ちようどお昼過ぎだし、何か美味しいものでも食べに行かない？」

やはりなあ・・・この調子だと絶対に感じていないよ。

まあこの爽やかな元気に惹かれているのは僕自身だけだな。

「ああ、そうだなちょうど良い疲労感だし、何か美味しいものでも食べてチャージしないとな！」

~~~~~そして、お互いの進むべき道を歩いて

馴れ合いになりすぎず…ドライになりすぎず…

あれから6回の誕生日を祝い、初秋。風は未だ生暖かい

~~~~~

僕は大学に残り、子供の頃からの夢を実現すべく研究に励んでいた。若者は真夏のような格好でキャンパスを闊歩している。って僕もまだ若者なはずだが…

先日研究室にて師匠とも呼べるほど師事を仰いでいる先生から呼ばれた。

そして、週に2回ほどだけれど、ピンチヒッターで僕が教鞭をとってくれないだろうか？というお話だった。

なんでも…旧友から頼まれた別のキャンパスでの講義が入って、スケジュールの調整が利かず困っているという。そこで、この僕に白羽の矢が！！！！

そして、今日その返事をする約束になっているのだった。

・・・コンコン

「松本です。先生はおいででしょうか？」

はつきり言って喉から手が出るほど受けたい話だったが、尻尾を振っておいそれと飛びつく軽いヤツでもない。それに来春から正式にコマ数の割り当てを僕にくださるというから、足がすくむはずだ。

「おお、松本君だね？こちらへ入りなさい。」
扉の向こうから老紳士の声。師匠とも言える恩師の和田教授の声に他ならない。

「・・・はい。失礼します。」

教授の部屋には何度も入ったことはあるが、今日は違う。

ドキドキが止まらない。面接を受けるよりもドキドキしていると思う。

そして、重厚な扉を開けて入ってゆく。

「じゃあ、もう一度聞くけど・・・請けてくれるかね、先日の話。」

「はい。宜しく願います。」

長年の僕の夢がまた一歩近づいた。つという心境ですので、有難くお請け致します。」

よし！噛まずにすっかり言えたぞ！・・・子供ではないが緊張のあまり失礼があつてはいけないからな。

「まあとりあえず、来週の火曜からだけれど、頑張ってくれたまえ。私個人としても、色々な意味で君には期待をしているのだよ。

今までの伝統や型にはまったやり方も大事だが、今の世代の生徒達にあつた新しい斬新なアイディアも必要だと考えているのだよ。」

頭の中では大人気ないが：バンザイしてジャンプしている自分がいる。

もちろん顔はクールに真面目に装っている。

斬新なアイディアとは。。やはり、いつも話している自論のことだろう。

「期待に応えられますよう、頑張っていきたいと思います。宜しく願います。」

「いやあ、こちらこそ頼むよ。」

今まで院に残って研究を続けていた甲斐があったというものだ。来週から恩師の代理として表舞台に立てる。

助手って位置は未だ変わらないけど。。。いつかは必ず！

僕のデビュー戦っというか”初陣”だ！！正式に教壇に立てるのだ。夢のような…夢ではない話だ。

しかもこんなに早く叶うなんて。実際思ってもいなかった。

一礼して、教授の部屋を出た。

廊下を歩く自分自身を客観的にみている感じがする。おかしい気分だ。

まず、董に報告。っていうか仕事か？メールにするかあ。

それから両親に報告しないとな。

・・・そして大事な僕の原点でもあるあの人のところにも報告しなければならぬ。

速人は自宅の最寄駅へと着いたが、いつもとは反対の南口へと降りて行った。

ゆっくりと商店街を歩き、途中花屋へ立ち寄り

そのまま駅の方へは戻らずに、さらに先をゆっくりと…しかしっかりとした足取りで進んでいった。

商店街の賑やかな音楽がフェイドアウトしてゆき、小さな畑や民家、小学校が見えてきた。

ちょうど小学校の正門と向かい合うようにして

古めかしくも重厚な木の扉と白壁に瓦が続き、速人は立ち止まりきびすを返し軽く一礼した。

頭を上げると立派な門を潜り入っていった。

そこは立派な寺院だった。

本堂はさほど古くはないので途中で立て替えたのだろう。

速人は本堂で手を合わせた後、ゆっくりと墓地の広がる方へ足を運ばせた。

深呼吸をした後に、祖父の墓前へ報告すると柔らかな表情をし、家路に着こうと歩き出した。

するとズボンに入れておいたケータイがブルブルと震えだした。

「あつ！メールだな。仕事終わったのか？？ はいはい。今見ますよ・・・」

薄手のコートの裾ををはらりと開いてズボンのポケットからケータイを取り出した。

メールの主はやはり董だった。

『速人！！おめでとう！良かったね。ホント良かったね。』

今すぐに駆けつけたいけど、今日はどうしても抜け出せない打ち合わせが入ってて…

だけど、明日の夜は空けておくので二人でお祝いしようね すみれ』

董は大学を卒業すると、語学を活かして貿易関係の商社に就職した。まだまだ新人の部類だから。っとは言うものの、最近はとくに忙しそうだ。仕方がない。

僕が忙しかったり、どうしても集中したい期間はメールだけのやり取りで過ごしていたし

こんなのはお互い様ってことで、大したことじゃない。

しかも、その方が僕にとっても都合がいい。

なぜならあの日僕が思い描いていた”僕たちのシナリオ”には続きがあつて、まだ終わっていないから。

僕の夢が叶ったら…

僕たちが初めて出会った学校を見に行つて

あの坂の下の神社の境内で、「結婚してください。」っと言おうと決めていた。

よし、これからシルバーのリングを買った店に行こう。

いつまでも、いつまでもキミが笑っていらるように・・・僕はずっとキミを守り続けるよ。

最終話：夢が叶った時・・・（後書き）

長く長くつたない文章を読んでくださってありがとうございます。目に付くところは数え切れないでしょうが、とっても大事にしてゆきたい作品だと思っております。

温かい目でご指導願えたら嬉しく思います。ホントに本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6279f/>

はじめまして・・・よろしくです。

2010年10月21日03時15分発行